

ることは、備前の岡山育ちの夏羽織でも恐らく忘れたり知らぬ者はないだらう。此の秋を無暗矢鱈に寂しがつたり忙しがつて許りゐられてはたまものではない。

見よ。百姓は豊年萬作と喜び朝早やくから働いてゐるではないか。穢りの秋だ。私のすきな柿も成る。松茸も出来る。水産日本は益躍進して捕鯨まで力を入れてゐるではないか！

湖も鯢が元氣潑刺たるものだ。栗飯・茸飯を持つて紅葉狩だ喜びに充ち溢れる行樂の秋を謳歌しようではないか！

稔の秋は百姓が大部分であるが都會にも古く京落の地に葵祭あり。花の江戸の神田祭をはじめ、秋の祭も多く行はれてゐるではないか——

寂莫の一面のみを見ず米穀成熟の稔の秋を讀へよ——私は秋の喜びに充ちて筆をおく。

## 讀 書

三年 鳴 倉 昌 一

夏休みも終つて愈々明日から二學期になると云ふ時「ようし二學期こそ本んをうんと讀んで出来るだけの知識を身につけてやらう」と思つた。ところがさてさうなると、復習や豫習に追はれてしまつて、身も暇がないばかりか、精神的にも字課以外のことも心に心を馳せるなまとは、到底望めなかつ

な一冊の本が取出される。それはアレクサンドル・デュマの『モンテ・クリスト伯』で。構想が大きく名調子なので、僕の好む所となり、愛讀書の一つだ。眼を通す。一頁、二頁……：：：本をめくることが繰返される。心も身体も物語に吸はれて行く……紙面に視線は落ちたまゝ、反れぬ。二十分の後には完全に話中の人物になり切つてゐる。殊に主人公であるエドモンド・ダンニスが無實の罪で暗牢へ投げ込まれ、人を呪つてゐる時、地下を掘り抜いて、會見したフアリアなり（狂人と呼ばれてゐる）一怪僧の爲す一舉一動に眼を見張り、さては彼の語つた意外の物語に自分といふものを失ひ、善良だつた彼がこゝに復讐鬼と生れ代つて、件の怪僧より數學、物理學、歴史、語學を學ぶあたり、思はず何物か、胸に迫つて来るやうな感じがして、讀後も尙その時の有様、言葉がこびりつく。

『法師は微笑した「あゝ、あゝ」と云つた「人間の學問といふものは如何にも限られたものでしてな。あなたに數學、物理學、歴史、それからわしに話せる三つ四つの現代語を教へて進ぜたら、もうそれでわたしの知つてゐることはすつかりお分りなのぢや。それをわしの頭からあなたの頭にお移しするには二年もあつたら十分ですて」「二年」ダンテスは云つた「應用の方なら駄目ぢや。が原則だけなら充分ですて。學ぶと云ふこと、知ると云ふこと、は違ふ。世の中には物識

た。しかし土曜日だけはこの願が叶ふのである。心は砂漠のオアシスをそこに求めるのだ。武道終了合圖のサイレン——言ひかへれば心の自由を告げるサイレンが鳴ると、僕の心は暖くふくらんで来るのだ。そして憧れの讀書の世界へ嬉々として飛んで行く。身に氣持よい軟かい秋の風を受け、毎高き人を思はせるやうな、よい菊の香を胸一杯に吸ひ乍ら。

土曜はい、ものだ。後に日曜と云ふものを控えてゐる。多くの余裕がある。此の余裕といふものが心に樂みを與へて呉れる。その樂みが讀書の世界へ導いて行くのである。先づ本屋へ寄つてそこで一時間許り居てしまふ。本のギッシリつまつた十幾つといふ本棚を人々の間をぬけ乍ら、始めから終りまで入念に見て行く『は、あこれが出版たなあ』これは面白さうだ』そして少し許り拾ひ讀みする。すると今までの堅苦しい事とは別の新しい知識を身につけることになる。僕は蒲足に浸り乍ら、尙も見に行く。これを土曜日毎に繰返してゐたら、終には本屋へ入らないと歸れぬやうになつて了つた。もう習性の一つとなつてしまつたのらしい。

家へ歸る。復習なまげ手につかない。夕飯までは、學科以外の色々なことを紙に書いたり、覺えたりなまげして時間を費してしまふ。

夕飯も又甘い。思はず五六杯平けて了ふ。

さあ愈々これからが『おらが時間』で。本箱から平素好き

り學者がありましてな。物覚えからは物識りが出来る。學者を作るのは哲學ですて』ではその哲學は習へないでせうか』『哲學は習へぬ。哲學とは學問の用を知つてゐる天才の手に依つて得られたあらゆる學問の總和なのぢや。哲學とは運きわたる雲てしてな。基督が天に昇つたのもつまりこの雲に足をかけたのぢや』

何程経つたか？ 氣が付いた時には、兩親の唇からかすかな聲がもれ、あたりも全く寢靜まつてしまひ、聞えるのは、カチ／＼といふ時計の音、湖の表を我物顔に暴れ狂ふ液の音、秋らしく乾燥したつれ本の葉の秋風に鳴る音、それだけだ。心が空しくなる。慾も辭した感じも何もない夢我夢中の境に伸んでゐる。人間もこれで持續して行けると良いのであるがやがて十時となつて、一日の最後に撞く、傳統ある城山の鐘の音が韻々として聞えてくる。これによつて心は更に落ち付けられる。今日は一日楽しく過すことが出来た嬉しさ。入相の鐘を聞いて双手を合す純粋な田園の人々（ミレーの繪にあるやうな）敬虔な氣持、それを以て床に入る。やがてまじらかな一夜の夢を結ぶのである。

斯くの如く讀書は恰度兩親が僕の成長を樂しみにしてゐて下さるやうに、僕の唯一の樂しみである。そして僕が立派な人になつて、親に安心させようとしてゐるが如く、書も亦僕を立派な人間にして呉れるだらうと自ら信じてゐるのである

## オリンピック大会

三年 横田不二夫

「日出る皇國の若人よ、聞け鐘がなる オリンピヤ

鐘高鳴りて君等を招く

立てよ若人、行きて戦へ

皇國の爲にぞ、合せよ力」

今ぞ全世界青年のスポーツ聖祭の幕は、去る八月一日を以て切り落され、現在全世界の環視の中に、第十一回オリンピックの豪華版はヘーゲンクロイツの都に繰り展けられた。世界五十三國より集へる若武者五千騎、日本も亦二百五、名の大軍を陣頭に進め、民族平和の戦は今や酣である。

抑々オリンピック大會の起原は、遠く三千年の昔ギリシヤ全盛時代に遡る。ギリシヤは、地勢・氣候・風光・文明等の諸原因に支配せられて、多數の都市國家が發達、分難してゐた。故に之等多數の都市國家を互ひに連絡融和する、二三の手段の一つに數へられたのが、同一信仰の多神教の大祭典を四年毎にオリンピックヤに行つて競技會を開く事であつた。當時のオリンピックヤ競技會の會場は、前記エリヌ南東のオリンピックヤ會期は五日間、出場資格は先住民族のアケヤ人、エオリヤ人を除く移住民族のドリヤ人、イオニヤ人であつた。きうして此等都市國家の選ばれた名譽の代表選手は、徒歩競争・戰車

競争・力競べを行ひ、又美術家・學者は其の作品の優劣を競

つた。又此の大祭典の間の四年間をオリンピックヤードと稱し、之を數へて紀元を記す習慣であつた。之が現行オリンピック大會の四年毎に行はれる由縁である。かくして、オリンピック大會は次第に擴張發展して、BC七七六年に行はれたものが盛大且華かなものであつた。其の後一時中絶したが、世界民族の提携、世界恒久平和等の雄叫びと共に、再び之が復興を見、一八九六年、アテネで第一回オリンピックの開かれたのを契機に、以前にも増して盛大な大會が行はれるやうになつたのである。

オリンピックの標章である五色の輪は、世界五大洲を表現するもので、赤はアメリカ、緑はヨーロッパ、黒はアフリカ、黄はアジア、青はオーストラリアになつてゐる。その繋ぎ合せは、五大洲の親善、提携を意味するものと云はれてゐるが何故オリンピックに關係があるのかは未だにはつきり解釋されてゐない様である。

次に、過去に於けるオリンピック開催地の跡を辿つて見よう。

第一回（一八九六年）アテネ（ギリシヤ）

第二回（一九〇〇年）パリ（佛國）

第三回（一九〇四年）セントルイス（米國）

第四回（一九〇八年）ロンドン（英國）

## 秋の行く

三年 高橋 希

惜 秋

凡ての緊張味・活動力が五體の毛細から湯氣と共に、スウツと抜け出て、このまゝぐつたりと、湯船の底に射着してしまひさうに、恍惚として温湯に浸つてゐる。

このまゝに死んで行きたい風呂加減  
秋の名残を惜しぬ細い雨が静かな音を立て、白金線のやうに庭の楓にかゝつて、色を附けて行く。一枚々々の葉端に瑠璃の露を宿して。

隣りの二階から琴の音がもれる。

露

秋の弱々しい日の光に淡い影を浮べたアスファルトの十字路に、人の影が疎に見えて、其他は一面に海の底のやうに灰白色にぼやけて見えた。自動車の警笛がぼつと鳴つた。

風

だん／＼西風が吹くやうになつて来た。  
朝は輝やかしい好日和で、今日こそはと思つた日も夕方には大抵雨が、さもなければ竹藪が海鳴のやうに唸る此頃です。

第五回（一九一二年）ストックホルム（スウェーデン）  
第六回（一九一六年）ベルリン（大戦で取消し）  
第七回（一九二〇年）アントワープ（ベルギー）  
第八回（一九二四年）パリ（佛國）  
第九回（一九二八年）アムスラダム（オランダ）  
第十回（一九三一年）ロツンゼルス（米國）  
第十二回（一九三六年）ベルリン（ドイツ）

さて、一九四〇年第十二回オリンピック開催の名譽を負ふは、東京か、否ヘルシンキか。それは全世界の注視的となる問題であつた。が、俄然三十六票對二十七票、九票の差で東京と決定。トウキョウー日本人待望の東京開催、長い間の夢が實現したのだ。かくなる上は、日本のスポーツマンライクな精神を遺憾なく發揮して、舉國一致、ロサンゼルスやベルリンのそれに劣らぬ、スポーツ日本に相應しい、盛大な意義ある、日本人の手に依るオリンピック大會を開かねばならぬ。

一九四〇年、時恰も皇紀二六〇〇年に當り、萬國博、その他國際的大會の行なはる、時、我等日本人は日本文化の躍進振りを、中外に宣揚する事を忘れてはならぬ。

唯でさへ、一年中で一番寂しい、感傷に走るこの時節に、風も吹かぬのに、庭の本の紅葉のした葉が涙の様にはらりはらりと落ちる。盛秋に頻りに鳴いた虫の聲は、夜毎、夜毎に衰へ細つて行く。灰色の深い霧が宵の町を塗りつぶして行く家並の燈火の火を吸ひ、風の音を消し乍ら。

## 秋 晴

今朝がたの雨にしつとりぬれた土がほや／＼と湯氣をあげてゐる。畠の隅に溜つた小さな水溜りに、澄切つた美しい秋晴の空——おいてきぼりにされた様にぼかんとした白雲がはつきりそのまま、静かに映つてゐた。冷いまで清澄な十月の空を映してゐた。

## 晚 秋

三年 杉原真一

だん／＼秋も更けて来た。

晩秋の夕方遅く、夕靄の立込める濠端をとぼ／＼と家に歸る。真紅の太陽が赫々たる光を放つて、花やかな今日の一日を終らうとし、天主微かな残光を投げてゐる。黄昏の濠端には高く舞ふ二羽三羽の鳶の外、猫の子一匹見當らない。あら

来た。

嗚呼、もう秋も終りつゝあるのだ。

夜遅く、机凭れてゐると、私の心は知らぬ間に寂しい思ひにとらはれて行く。静かな、水を打つた様な秋の氣を、突如破つて響く汽車の汽笛までがその氣持を一層深くする。冷たい夜氣に身が引縮む様は、深い静けさな縫つて来る時鐘の音までが、以前とは餘程違つた感がする。

恐ろしい冬が、もう其處まで訪れてゐるのかと思ふと、一層淋しくなつて来る。

## 我 は 去 る

三年 高田善之助

夏から秋にかけて、複雑な、優美な、細かい感情をさして獨時の美聲を競つて居た種々の虫も、一匹、二匹、さち何時の間にか委を消してしまつた。つい此の間まで、軽るやかにすい／＼飛んで居た赤蜻蛉さへ、見えない。それもさうでせう。もうおめかし屋の伊吹の高嶺も薄化粧をしたもの。

今日も晩秋の債を求めながら、落葉を踏みしめて、城山に上りました。其處、此處の公孫樹も、風が吹く毎に、一葉、二葉と、寂しく散つて行く。そしてあちこちで落葉を、がき集めて、然しるる煙が、ほと／＼と立ち上つて行く時。實

ゆる物がすつかり夕靄に包まれた中に、多聞櫓の白壁がほのかに浮んで、あたりには何んとも言はれぬ淋しい空気が漂ようてゐる。何處からともなく風が吹来つて、冷かに頬を撫つて、又何處ともなく去つて行く。その度に、此處に一枚彼處に一枚と今にも落ちさうに着いてゐる枯葉が友との別れを惜む様に赤い身を顔はせながらひら／＼と寂しくお堀に蔭を落して行く。

暮れ安い秋の秋の日は全く沈んでしまつて、唯家々の街燈の光のみが淡い光を暮方の街に投げてゐる。横町から吹いて来る風に思はず体をすくめた。

朝。山々は飽迄清く、何時もより一層近く見える。秋特有の空は奥深く、何處迄も澄み切つてゐる。黄色い日射が何となく懐しい。自分の口から吐く息が白く湯氣の様になつて後に消えて行く。朝日を横に受けて、自分の影が柔かく長く延びて、欄干の影と恰も背較べでもするやうに長くなつたり短くなつたりしてゐる。

知らぬ間に手が隠しに入つてゐた。

日中は未だ暖い。麗な日の晝休には、何時も校庭をあちこちぶらついて歩く。唯それだけで何と言ふことなしに非常に楽しい。眞綿にくるまつて空中に浮ぶ様に。

教へられる程の僅な枯葉を残したボブラの梢で雀が嬉しさうに轉つてゐる。枯葉が一枚又一枚と友の帽子の上に落ちて

にしみ／＼秋も終りだと感ぜられて、心の片隅に居た寂しさが、頭をむく／＼と持ち上げてくるのだ。

『愚案するに冥土もかくや秋の暮』芭蕉

淋しい秋の暮！ とり別晩秋の暮の淋しさは云ひ知れぬものだ。うら枯れた野を見下すと、華の湖岸よりはひ出た、聲もなき風の吹く毎に、よわ／＼した日を受けながら、白灰色の芒が、北を仰ぎ、南に伏して居て、一層わびしく感ずるのだ。もう數へられる程になつた楓の葉蔭に、昨日まで『スポーツのシーズン。勉學のシーズン』と謳歌して、靴音高く歩みつゞけて居た秋は何處へ行つたやら。黄色の波を打つて居た、米も早や美しき米俵と變り、後の刈田には、寂漠とした氣が漂うて居る。赤く夕日に照り映えて、熟し柿が、一つぶら下つて居る柿の木に、鳶が一羽とまつて、行く秋を惜しんでゐる様に、いかにも寒々した空に向つて『ピーヒョロ、ピーヒョロ』鳴き續けて居る。風が落葉を、巻き上げながら、吹いて来るので、寒氣が、ぐん／＼肌に浸み込んで、思はず身震ひする。振り仰ぐ天主閣の白壁は、葉一つつけない木や、さんよりした緑り木をバックに、西の湖に沈まうとする夕日の一抹の餘光に照り映えて、美しい。これをじつと見つめて居ると、有りし昔の刺戟、登城の行武、家制度の色々の追憶が、次々と浮び上つて来て、何時の間にか、時間が過ぎてゐた。突然耳元で、ゆつくり、突き出す寂びた鐘の音に、追

憶の夢は消え去つてしまつた。そしてあたりに、夕闇が迫る頃、秋は静かに歩み去り、来る冬が待つて居るのでした。

### 晩秋の午後

三年 大塚 圭造

校舎から外に出ると、すっかり晴れ上つた秋空には一條の雲が遠く城山の上に浮んでゐる。僕は銀杏の木の下でスタイルをしてゐた。これからお月様が出るまで練習をするのだ。黄色い根香葉が静かに散つていつた。淋しい秋とはまことに此の事だ。僕は何気なく小石の一つを拾つて前方の木に投げつけた……と、乾燥した空気を慣き通して小石は見事命中した。野球の試合で火の出るような本壘打をひとつとばした瞬間のバットの響きの音を思ひ出させる様なカーン!!!と快い音を立て、さうしてその音が静かな空中の何處ともなく消え去つてしまつた。其の時、城山の鐘が三時を告げた。いよゝ練習開始だ。

何と快い秋晴だらう。僕の瞳は再び美しい秋空へと轉じたしかし此の澄み切つた秋晴も一日とあの寒い……として冷い冬の日に近い近づいて行くのだ。遠からずお別れしなければならぬ秋晴よ。

フリーデング終つた。だん／＼と日は西に傾いた。桃色の

お日様の微笑がしだいに淡くなつて行く。はや天理教の木の間から美しい十五夜の月が上り始めた。そして城山の森の奥からは静かな夜の帷が降りて来る。堤の木の上で鳴いてゐた鳥の聲も何時の間にかひとつそりと絶えて柔い水色の霧びふわりふわりと漂ひ始めた。

校庭はすっかり暮れた、僕は友と語りながら歸途についた

### 晩秋

三年 細川 常雄

霜だ。屋根も垣根も野良も眞白だ。芽を出したばかりの畑の蠶豆も白く萎れて、地面に平伏してゐる。空は眞青に澄み、今しもさし昇つた朝日が、あたり一面を明るくする。隣では稗子の準備がはじまる。下敷をし、筵を廣げる、靱を運ぶ。向ふでも子供が白い息を吹きつづす／＼としながら、父親と靱を擔つて居る。

もう半ば以上刈取られた田圃の方からは、そろ／＼ゴウゴウと稻扱の音がし始める。

大抵の木は葉が落ちて、枯木の様になつて居る中に、梢にすゝなりの柿が朝日を受けて、赤々と照つてゐる。垣根のそばの柚の木には、みづ／＼しい金色に輝いた實が、緑の葉の間から幾つも顔を出してゐる。

何所から飛んで來たか、けた、ましい百舌鳥の鳴き聲がする。

霜の消える頃には、太陽はきら／＼輝いて、あたりには人の氣もない。只お婆さんが、子守をしながら、糲さがしをして居る位のものである。其の横には、猫がす／＼と圓くなつて眠つて居る。そして筵の下の方からごくかすかな虫の音が聞える。

しばらくすると、此の静けさを破つて、騒々しい鳴き聲がして、七八羽の雀が靱を拾ひに下りて來る。

軒下の吊柿が黒味を帯びて、暖かい日光を受けて居る。畑の大根の生き／＼とした葉の緑色が、はつきりときはだつて居る。霜になへた蠶豆も今は、元氣よく晩秋の空気を呼吸して居る。

### 雲

三年 満島 俊次

もうすっかり秋になつた大空には、弱々しい太陽が僕の凭れて居る櫻の木を見下しながらぼ／＼えんで居りました。

樹にもたれた僕は、いつもの様に、青く澄み切つた秋空の一隅に浮ぶ白雲に見惚れて居ました。

秋空に浮ぶ白い千切雲は静かに動いて居ました。その動く

雲を見送つて居る僕の頭は懐しい幼い頃の思ひ出の糸をたぎつて居ました。

それはよく晴れた晩秋の一日でした。

まだ幼かつた少年の僕は、こんな日にはきつと外に出て涯しない、謎の、大空を眺めるのでした。

その大空にはきまつて白い千切れ雲が飛んで居ました。そして幼い僕の心はその不思議な白雲を追ふのでした。

いつまでも／＼追ふのでした。

そして日輪が西空の雲をばら色に染めながら静かに西の山に隠れる頃、僕は家に歸るのでした。

僕が樹に凭れて眺めて居る雲は、嘗て僕が幼い頃追ふたあの白雲なのでした。

僕はかうして秋空に漂ふ千切れ雲を眺める度に、これを追きた幼い頃の僕の心を考へて見るのです。

そして考へて見る度に、僕はあの頃をたまたま懐しく思ふのです。

樹に凭れて、少年の夢に耽つて居る僕の足下に、いつしか日暮が近づいて來ました。

紅い夕日は僕の眺めて居た乳色の雲を紅く染めて行きました。僕は歩き出しました。

次第々々に秋の大自然をぼかして行く紫の夕闇が僕の目の前に迫つて來ました。

## 謎を解く喜び

三年 辻 千秋

我々は友だちなごと幼い時には一しよになつてよく謎かけ遊びをしました。その時に、謎がうまくとけて、ちやんと答へる事が出來たなご、我々は得意になり、大いに嬉しがつてゐました。そして謎が無ク敷ければ、無ク敷い程それを解きた時の喜は大であります。或る逸話に、こういふのがありました。今から凡そ二千年も前に、ギリシャの國王にヒエロといふ人があつた。或時鑄物師に命じて黄金の冠を作らせようとして、彼に幾らかの黄金を渡した。やがて彼は冠を作つて王の前に持つて來た。然し用心深い王は、その冠が全く黄金のみで作らせて居るか、と、うたぐつたので、當時の有名な科學者アルキメデスを呼んで『ごまかして居まいかきうかを檢らべて見よ』と命じた。アルキメデスは畏まつて承つたけれど、さて、それを檢べるのにさうしたらよいかに迷つた。冠はこはしてみる事も出來ず、彼は全く途方に暮れた。ある日彼は銭湯に行つて、風呂に入らうとした時、風呂桶には水が一ぱいあつたので湯につかるとさうと湯はあふれて

たなら、それは實に我々人間の共有する寶となり、己の喜びだけでなく、すべての人類の喜でせう。人間に取つてこれ程貴重な寶はないと思ひます。あの有名なアルキメデスの原理こそ、實に貴いものです。

## 雪の夜

三年 西村 政雄

踏みつける一足ごとにざつ／＼と音がして足駄の齒がめり込む、ひそやかなそたでもほの／＼と明い雪の夜の道……軒下に寝てゐた隣の犬がむくりと起き上り尾を振りながら二三間ついて來たが直ぐ戻つて行つて元の所にまるまつてしまつた。もう何處の家でも重々しく積つた屋根の下にひつそりと深い眠りに落ちてゐるらしい。あたりは何物音一つしな、立止つてじつと耳を澄す、と幽かにさら／＼とマントに降りかかる雪の中で動いてゐるものと云へば私一人……やつと一人一人が通れる位はさ果てはしんしんと降る雪に遮られて見えないあたりまで續いてゐる轍らしい一筋道をまるで一本橋でも渡る氣持で歩きながらフーと夜氣の中に息を吐いてみたらそこ丈の雪がスーッと向に飛んだ。歸つて見ると家の前の道路から玄關までの間は出かける時掃いて行つたのにもう白々と足駄ももぐる位積つてゐる。玄關の戸を開けか

た。彼の腦裡には異様な考へが浮んだ。あ、そうだ、と彼はいきなり飛出て裸のま、一分つた、分つた』と叫びながら、家に歸つた。そこで彼は早速、冠と同じ重さの金塊と銀塊とを作つた。別に水を一ぱい満たした大きな器を用意して、先づ金の塊をつけると、幾らかの水がこぼれ出した。そこで彼はその水を計つた。次に銀塊を他の水へつけると今度は前よりも一そう多くの水が流れてた。さて、最後に冠を水につけてもう一度同じ事をやると、こぼれた水は、丁度金塊の時よりも多く、銀塊の時よりも少なかつた。此れで冠は金銀を混ぜて作つてある事がたしかになつたので、彼はその旨を國王に申し出た。と云ふ様な事があつた。今から見れば、アルキメデスの解いた謎はそれ程六ヶ敷い事はないが、二千年も前の時代には、その謎が解けただけでも、彼にはきんに嬉しかつた事でせう。しかし彼は寧ろ皇帝のおほめに預かることだけで嬉かつたと言ふよりも、彼が學者としてこの眞理を發見した事が彼に一層の喜を與へた事でせう。その證據には、は一生涯、そう云ふ眞理を見付ける事に一心になつて、當時人々に知られてゐない事柄を多く、明らかにした。學問上の謎を解くのは、つまり眞理を見出す事であつて、きう云ふ眞理は、假令、アルキメデスが死んだ後も、永遠に人間の間に残つて行き、そしていろ／＼な役に立つのであります。だから我々が之から後でも、學問上の謎の一つでも解く事が出來

けたがふと思ひ返して裏に廻り持つて來た。足許からさうと掃きつけて私はその音に自分ながらびつくりしてしまつた誰かが目醒めてゐてこの音を聞きつけたらさぞ怪しむだらう晝間の中に掃き溜められて兩側はこんもりと小山のやうになつてゐる所へ今亦さつ／＼力の限り掃きつけられてしまつた。あ、あの檜柑の木の上には一昨年私が植えた福壽草一つ一凍りついた土の中から勇ましく小さい芽を出してゐたのに、その所迄掃いて行つて私はふと頭を重々しく壓して來るやうな氣配を感じて振り仰いでみた。と門柱に蔽ひかゝつた松の枝が今にも折れる許りに雪を載せてたんでゐるのだ。枝の根本のあたりを箒で突上げてさつと逃げた瞬間……ドドツと許り眞白な雪けむりの一團となつてひびき落ちひびんと枝が撥ね返る。障子の隙間からもれてゐる電氣の光ですかして見たら眞白に落ちた雪の上に点々と枯れ松葉がこぼれてゐた。

## 晩秋

三年 日下 顯雄

「チユン、チユン、チユツ、チユツ」  
一際高い元氣のよい雀の聲が、鼻のさきてした。私はびつ

くりしておもはず頭を揚げた。聲の主は目の前に居る。それだ二羽である。彼等は少し離れて、互に向合つて盛に囀つてゐる。私は今迄考へてゐた事をすっかり忘れてしまつて、急に快活な氣持になつてしまつた。

日の短い太陽は、いつの間にか西に傾いて、眞赤な夕陽は弱々しい冷いあれでも光があるのかと思はれるやうな光をそつと投げかけて、あらゆる物の影が長く長く延びてゐる。刻々とつり變る血の様な雪のたづまひ、煙のやうな夕霧に包まれた鈴鹿の山々。あたりに晩秋の氣が満ち満ちて秋風に顔がひやりと冷い。

自然は偉大である。自然は美しい。殊に秋の自然は美しい。秋は春の長閑さに對して何となく忙しい。夏の暑さに對して寂しさがある。スポーツの秋も過ぎ晩秋は、此の美しい自然を見て社會や自分といふものを考へ合はせると、つくづく社會がばか／＼しくなり、其所にやはり憂鬱を感じるのである。赤い夕日に心も身も吸ひ込まれてしまひさうである。

嗚呼晩秋だ——人生の晩年にも譬ふべき晩秋なのだ。もうすぐあの冷淡な、残酷な、死の冬が来るのです。田圃の稲も大部分刈られて、黒々とした肌を北風に晒してゐる。最後の一枚までも散り盡した枝に、二つさつ忘れられたやうに取り残された柿、石榴。ガラ／＼と空車が表の道をあはたゞしく通り過ぎた。人々は今收穫のとり入れに忙しい。

『ゴーン　ゴーン……』

悲風の齎す入相の鐘の餘韻が長く長く續いて、秋を更に更に深めて行く。かうして大自然は今晩秋の夜の深い眠りに入つて行く。

何時の間にか雀の鳴聲が絶え薄暗の中に白い菊の花が香を放つてゐる。

## 草　取　り

三年　谷　口　勉

日が眩めく輝きながらも小寒い秋の午後、幼い妹を引連れて茸取りに出かけた。妹は小躍りしながらついて来る。だら／＼坂を登る。稻扱の騒しい音の他には耳を襲ふものは何一つない。暫くして道幅の廣い俯仰美觀の地に出た。この優景に心を奪はれて佇んだ。妹は木の切株に腰を下して、疲れ果てた態である。仰けば雲一つなき日本晴、實に廣々とした景情である。つく／＼仰いでゐるうちに、明治の帝の御製が心に浮んで來た。視線を地上に向けると、汽車は喘ぎ／＼彼方の山麓を蛇つてゐる。丁度蚯蚓の様だ。不圖、今迄冬眠中の蛙の様になつてゐる妹が「あ、あそこうちの家が見える」と云つて指さした。眼をその方に轉ずれば成程、愛らしい我が家が黄色い毛氈の中に浮んでゐた。身も心も。心ゆくばか

『チュン、チュン、チュツ、チュツ』

又雀が側で鳴いた。否、又ではない。さつきから鳴いてゐたのであらう。夕暮の美觀に見とれてゐた私は、恰も吾々が始終聞いてゐる柱時計の振子の音が耳に入らないかの如く、側で囀つてゐる鳴聲が聞えなかつたのだらう。此の雀の鳴聲を聞いた途端、憂鬱は何處かへ吹飛んで急に快活な氣持になつた。人々の作る騒音が段々少くなつて彼等の鳴聲は一層烈しくなつた。電線にも二、三羽止つてゐる。盛に首を動して何事かを囀つてゐる。眞向から見ると、口がばかりと圓く小さく開いてゐて面白い。可愛らしい。ピヨ／＼と飛んで廻り私の顔をけりりと見てチュツ／＼と鳴いて又飛んで廻る。今彼等の小さな顔の内に何んな事を考へてゐるだらうか？何を彼等は話し合つてゐるのだらう？　死といふ事を考へた事があるのだらうか？

終日餌を求め、囀り、いかにも平凡に生活して行く彼等は實に愉快そうである。元氣に溢れてゐる。快活そのものである。彼等は話す言葉を持つてゐるのかもしれない。然し死といふ考を持つてゐて、あの快活さが豈得らる可けん乎だ。そんな考へは彼等には毛頭無いに違ひない。而り、吾々に於てもさうであれば人生が愉快だらう。一步々々を愉快に過して行く方が一層善き人生の歩みだらう。死を考へてゐてはつまらない。

り廣々とした私は、磊々たる坂道を登り始めて「もうすぐだもうすぐだ」と妹を勵しながら。遂に僕の山の入口に著いた小松の立ち盡してゐる濕地林に入る。おや、こんな處に松茸が。僕は勿論、妻も舌を巻いた。妹は嬉んで籠の中に入れるそして、つく／＼籠の中をのぞき込んでゐる。二、三本濕地を取つて、林の中を登り出した。もう一足で山頂に著かうとした時、又もやびつくり、ざらりと並んだ濕地群。土鼠が土をむくり上げた様に整列して「こんな小さい籠でははらんよ」と「僕が言ふと、妹が「歸つて、大きい籠を取つて來よう」とにこ／＼した答へた「過しないやうに氣を附けて行つて來な」と言ひ終つた時には、妹は既に姿を消してゐた。僕は濕地を集め始めた。其の面白さ、其の快さ。僕は大きな濕地の山を作つた。僕はもう無いかと思つて、山中駈け廻つた。處々で大きな濕地の群を見附けては、其處に積み重ねて山を作つた。濕地の子の群も澤山見附けて、それを木の葉で、分り易いやうに、覆つて置いた。僕が一心に木の葉で、子濕地を覆つてゐると何處かで妹の聲がする「おい」と返事をしして聲の彼方を眺めると、妹は濕地の積んだ山の傍に大きな籠を置いて、にこ／＼して「こんなな澤山あつた」と言つて嬉ひの餘り、疲れも忘れて、茸を籠の中に入れてゐる。僕は「大へん早かつたね。苦しかつたらう」と言つて勞つてやつた。そして妹と一緒に濕地を集めた。大きな籠に半分は採れ

た。妹は大喜びだ。そして突然「兄さん、松茸山へも行かう」と言つた「又澤山あるかも知れないよ」僕はかう言つて、重い籠を擔いで、松茸山に向つた。しかし松茸は不景氣だつた。山の隅から隅まで捜しても、唯四本しかなかつた。その中の一本は大きくて、それは妹が採つたのです。妹は大自慢です。もう五時に近いのであらう。日は西の山に没しやうとしてゐる。入相の鐘の音が微かに耳に入る。寒さは頻りに身邊に襲ひかゝる。しかし我等に歡を與へるのは、茸と極美の最も言ふべき夕陽であつた。二人は嬉び勇んで歸途に著いた

## 土に親しむ

三年 小川 清孝

サクリ！鋤が深く土の中へ入り込む。クルリと土を返す。腰が痛い。未だ始めて間もないのに。

北の家に引越して來た時には、よく耳についたあの鐵工場の機械の鈍い音も、今は反つて朗らかに然も元氣に聞える。弟の英語を暗誦してゐる聲がする。

「What time is it now? What time is it now?」  
澄んだ秋の大氣の中にその聲は吸ひ込まれて行く。

「清孝、土は可愛い物だらう」  
何時の間にか私の後に來てゐる父が言つた。

## 空

三年 橋本初次郎

私は唯一人九條野山への道を行んでゐた。

道の兩側の田の稻はすっかり刈り取られて、薄黄を帯びた紫雲英のみざりが、幾年も苦勞して働いた農夫の手の様な、荒れす・けた稻の切かふの間に散らばつてゐた。麥田は黒い土の間から縁の芽が二三分出てゐた。人々は取入れを終つたので山へ松茸を取りに行つてゐるのか田の中にはあまり見受けられない。

ふと大空を見上げる。

空は慈悲の抱擁を以て被ひかぶさつて居る。

晩秋の大空は冬籠りをする動物や植物に暖い光を投げてゐた。私達は地上の營にあくせくとしてゐる。私達は私達の上にある私達の目で見へる限りで一番大きな、そして、一番美しい空の事なきは全く忘れてゐる事が多い。

それが時たま私達が旅に出た時、世俗の惱を忘れ果てた時つく／＼空の美しさを感じる事が出来る。

須磨驛を過ぎて、暮ゆく汽車の窓から見た空。

朝明けの風いだ港の夢を包んだ茜色の空。

九條野山の芝生に寝ころんで見上げた空。

それ等は終生忘れる事が出来ぬ。私は時にアルプスの様な

「ふ、本當にさうですね」

私は今迄にこれ程楽しく、これ程元氣に仕事をした事はなかつた。その仕事をなすには金も名譽も必要でない。唯健全な此の体と美しい心が必要なのだ。唯自然を愛して生きるのだ。唯土を友として。

限りない太陽の愛を知るのも土を親しむ者であれば、小鳥の囀る聲に聞き入るのも土を、自然を愛する者なのだ。

神經質なインテリぶつた若い男がサンデー毎日を二つ折にして小脇に抱へてゐる姿が如何に馬鹿々々しいものであるか私は悟る事が出来た。

「兄さん將棋でもしやうか」

「いやだ。かうしてゐる方がずっと面白い。お前もやつてみないか」

私は本當にさう思つた。唯其の時の口からの出任せではなかつた。

「はい、手がお留守だ」

サクリ！クルリ！サクリ！クルリ！

同じ動作の限らない楽しみよ。

「お父さん、俳句は出来ましたか」

「いや、まだ一つも。ハフ、ハフ、」

白菊が美しく咲き揃つた。秋の柔らかな日光が白菊に手をさしのべてゐる。いや菊程でない。總ての物に對して。

高い峰に立つて、自分の体全体を美しい空の爲に被ひつくされたと思ふ事が有る。

伊吹山の頂上に立つて仰いだ紺青の秋空!!

私は其を想ふ時、ふと一年も二年も合はなかつた友に對する様な懐しさと、一種敬虔な思ひに充される。

夜の空!!

夜ふと空の電燈を消して、窓の戸を開ける事が有る。すると前の山から昇つた月が、さつと私の室へ入り込む。其の月をじーと見つめてゐると、思はず、ぶる／＼と身震がする。時には夜遅く迄起きてゐて、雨戸を閉める時、ふと思ひ出した様に眞暗な空を眺める事が有る。そして其處に星が一面に撒き散されてあつた時には、誰か歌つた様に、世界は自分と星のみで作られて居るのではないかしらと思ふ。もし一面に眞暗でたまに一つ二つの星がチロ／＼と瞬いてゐる時には美しいと云ふよりも寧ろ、懐しき、親しき、が胸に迫つて來るのを覺へる。

幼い子供が時々、いや常に空を眺め、月を眺めて、お盆の様な月が……と歌ふのを見て、何故人は子供の中は空を仰ぎ大人になつて來ると土ばかり眺めるのだらうか……。

西の空を眺めると、赭い夕日に照り映へて眞紅に熟した柿の木の上を一羽の鳥が音もなくすーと飛んで行く。

西の山の雲は眞紅に燃えてゐた。

## 自轉車旅行

三年 豆子 清 一

僕は此の夏休みわざ／＼富田林の方から遊びに来てくれた芝本君と自轉車旅行の計畫を立てた。まづ行く所を定めなくてはならぬ。なるべく面白い所を言ふので、多賀神社へよつて八日市へ行かうと思つた。

翌る日九時頃家を出發した。多賀神社までは道がわかつたので大そう早かつた。太鼓橋の前で寫眞を寫し合つてから一休みした。其の時、芝本君が「醒井の方が面白いだらう」と言つたので行く方向を忽ち百八十度廻轉、北方醒井に向つたペタルを踏んだ。皆目道がわからないので辻へ来る度びに地圖を尋ねてはペタルを踏んだ。少し曇つてゐる空も今はか／＼と照りつけてゐる。上衣を脱いでゐても中々熱い。僕は漸く松並木に入つて少しは楽になつた。未だ十一時であるのにもう空腹を覚えて來た。百姓さんは今少し暇があるのか田へも出ずに家に多く居る。たまに草刈りに出た人を見るくらゐだ。稻は順調に進んで居て此の秋の豊作を感じる。貨物自動車は砂を巻き上げて抜いて行つた。急に水が飲みたくなつた。汗が背中をちつとりと濡らせた。中々苦しい。僕は喘いでゐる。又今度はさも樂しさうに腰を掛けたタクシーが砂塵を巻き上げて飛びさつた。益々水が飲みたくなつた。

めて泳いでゐる鱒を見たのはそれから少し後だ。水車様の物が川の一隅にもうけられて他は鱒が下らない様に堰き止めである。何だかエヂツンの發明品とか書いてあつた様な氣がする。それから又少し登つて自轉車を下り徒歩で登つた。辨當を開いた時はなんと二時頃であつた。

食後水源地へ向つた。盛んに水蒸氣が立上つてゐた。攝氏十二度位とか書いてあつた。その川の昔の流れ道らしき洞穴に入つた時、その涼しさと言つたら到底自分では言ひ表し様がない。今までかん／＼と注ぐ太陽の熱下にペタルを路んで來た自分達は、今はもうその疲れも何處へか飛去つた此處を去り難い氣がした。又渾々と洞穴より流れ出る水を飲んだ時自分の氣の壯快になるのを感じた。美味しい水だつた。

## 菊 賣 り

三年 寶 意 敬 造

「君、これとそれをくれ給へ」  
「はあ、有難うございます。おーい〇君、一寸付けてくれ給へ」

朗かな呼聲があちこち入り亂れる。今日は僕等三、四年生が今春以來、毎日／＼其の成長を樂しみにしながら育て、來た菊の賣出し日だ。僕等にとつては、何ヶ月も前から期待し

鳥居本へ入つて一軒の家で水を貰ひ一息入れた。

下矢倉と言ふ所て道が二つに別れてしまつた。地圖が云ふには右が國道、左が縣道又は之に準ずるものだ。そして勿論國道の方を行けば地圖は醒井へ近いと言ふ。しかし二人共不思議なのはその國道と言ふのがなんと徑幅半間未滿なことだ。しかし醒井へは確に近い。故に此の廢れた國道を行くことにして。暫く行くと山になつた。地圖は摺鉢峠と言ふ峠だと言ふ。仕方がないから押し上ることにした。直きに越えられるのかと思つたら何と中々だ。その上坂は急だ。自轉車は登らない。坂が四十五度も有る様な氣がした。又今さら下りる氣もしない。漸くにして峠の頂上に著いた。十軒ばかり家が並んでゐる。こんな山の上にも家があるのか、町へ行くに今の坂を往復してゐるのかと驚きながら水を貰ひに行くと氣安く茶碗まで出して來て下さつた。鳥居本の水とは湯と永程差があるやうに冷たかつた。お禮を言つて其處を下り又辻へ來た。其處にハイキングコースの立札が立つており醒井へ行く道ははつきりしてゐた。しかし兩側は杉の大木で、晝なほ暗き箱根の昔とても言ふべき感があつた。

やうやく番場へ出た頃は一時であつた。道は下り坂で道幅も凹凸は激しいがこれなら國道と思ふ程の道となつた。醒井へ著いてやれ／＼と思つたが中々中々養鱒場まではあるらしい。道の右側の山を崩して何か探つてゐるらしい。二人が始

てゐた楽しい日なのである。

鉢を移す者、荷造する者、一人としてぼんやりしてゐる者はない。僕等はこんな事は全く初めてで、なか／＼お客とうまく話せない。種類を聞かれては赤くなり、花の名を聞かされては頭をかいて、一々先生に應援を求めねばならなかつた。全くなさけない商人だ。しかし皆、はしやいで、陽氣だつた。だん／＼人もふえて來る。十時頃から人がぎつと押寄せた。僕等は此の時とばかり、腕によりをかけて、失敗しながらも一生懸命立働いた。

見る／＼花は賣れる。空鉢は重なる。僕等は全く得意だつた。僕等の丹誠籠めて作つた、この熱と汗との結晶が、胸がすくやうに賣れて行くものだもの。

「おい！、あのおやじさん、君の花を買つたぞ」

「やあーほんとかい。これで僕の努力も、やつた甲斐があつた」

友は嬉しさうである。やがてあの花が家へ持つて歸られて床間なり書齋なりへ飾られるのかと思へば、誰しも得意にならざるを得ない。

昨日、値段を付ける時は、安すぎると云つて不平がつかつたのだ。

「先生もう五錢高くしたらさうです。賣れなかつたら、値下げをしたらい、じやありませんか」と云ふと先生は



「そんな掛値をしてはいけない。信用が大切だからね。それに『お安くお分け致します』と云つてあるのだから、安くしておかう。安い方が買ふ者に徳だからね」とおつしやつた先生、なか／＼正直だ。

その所爲かまけてくれと云つて来る人も誰もない。やはりこんな光景は彦中でなければ見られぬ、なき、自慢したくな

る。ホーツと一息ついたのは正午も少し廻つてゐた。小菊はあまり賣れねかつたが、大菊はほとんど賣れてしまつた。皆、自分一人で賣つたやうな顔をしてゐる。愉快さうだ。太陽は晴朗に輝く。

「晝からは五錢づつ、値下げしよう」と先生が言はれた。

「先生、値下げなんかせんでも全部賣れますよ」

みんなはなか／＼慾ばりだ。

「君等が熱心に働いてくれるからね」と先生。僕等は一齊に大口あけて笑つた。

午後の活躍に備へる爲、腹がへつては戦が出来ぬとばかりこの暇な間を利用して、そ／＼と小使室へ食事をしに行つた。

## 夏 二 題

二年 葛 滋 郎

### 一、窓

「明日は雨かなあ。」

多景島のむこうの羊雲を眺めて呟いた。

高商のグラランバのボブラの葉が、生温い風に煽られて表を見せたり、裏を見せたりしてゐる。

裏の森から蟬の聲が、こびりつく様に聞える。

じつと耳を澄してゐると、小蟬、油蟬等にまじつて、つく／＼ばうしの聲が聞える。すぐ手前を赤蜻蛉がすい／＼と飛んで行く。もう秋だ。

裏の干物桿につなされた浴衣一枚時折吹く風にふわり／＼と膨れてゆれる。

城山の鐘が重苦しく四時を報じた。

雨でも催しさうな初秋の日。

### 二、涼 み

酷い夕立のあがつた夕方、きわやかな夕風が頬を打つて氣持が良い。

まだ向ふの方で稲光がしてゐる。

縁にねそべつてゐると、冷々として心地よい。

此の雨で蚊もめまり来ない。それにまだ蟬が鳴いてゐる。

が然しもうそろ／＼葦からは虫の聲が懐しく耳に聴こえて来る。透る様な聲、鋭い剃刀の刃を撫でてゐる様な聲、球を轉ずる様な聲、いつ考へてみても、夏ももう終らうとする。秋近い夜は良いものだ。

夜中に不圖起きて聞く虫の音も良いが、この様に冷え／＼とした氣持で、涼風を受けて聞いているのも又格別である。

## 勇ましい鮪の陸上げ

二年 寺 本 正

僕は八月一日から十日間の豫定で敦賀へ行つた。

最初の日だつた。鹽からい海水に十分に浸つて、歸途川邊に来ると四、五隻のモーター船が『太陽丸』と書いた旗を風にひらめかして川岸に留つて居て、何だか其の邊一帯がさわ／＼して居たので側へ行て見ると、鮪の陸上げの眞最中であつた。

鮪と云つても平均五、六十貫、丈が約二米も有る様な物すごく大きなのが何百尾となく陸上げされるのだから、其の勇壯なることまるで戦場の様である。

仕掛はすべて分業であつて見てゐても面白い程敏速である。モーター船の中で鮪の腹を立切り水を入れる者、鮪の尾に起重機の繩を掛ける者、繩を引つばつて岸の方へ廻す者、鮪の

尾を鋸で切る者、荷作りする者等々、總てキビ／＼と早く出来て行くので側で見ても目が廻りそうである。

うつとりと見とれてると突然「ブウ——ブウ——」と自動車の警笛の音にはつとして逃げた。見ると貨物自動車が一臺又一臺、忽ち自動車の列が出来た。すると待つてゐた人夫達が一勢に節面白く音頭を取りながら積込む。其れが終ると自動車は目的地を目指して八方に散つた。

中には長濱の人々の食膳に上るのもあらう。或ひは京都の所々の市場へ行くのもあらう。

僕はつく／＼便利な世の中だと思ひ深い感慨にふけつた。

尾を切られた時、荷作りされた時なごに流れ出た血汐であたり一面が眞赤な血の海でほの紅い夕日に映えて一層戦慄さを感じしめた。腥い風が僕の鼻をついた。この時の光景を思ひ出すと當分は鮪を食ふ氣にはならぬ。

何だか可愛想な氣もする。

モーター船はもう陸上げを終えたのか、又白波をけたて、沖の親船目指して進んで行つた。

## 海 邊 の 夜

二年 寺 村 道 夫

キャンプの夢まごころかなる夏の夜を、蚊に攻められて一人

天幕を抜け出た。晝の激しい運動に目もとろ／＼とし少しばかりつかれて居たが蚊の襲撃には居た堪まらず氣持のよい月の濱邊を歩かうと言ふ氣になつたのだ。唯心なく――。

天幕の外はすうつと身に沁む夜風が冷たかつた。思はず肩をすぼめて慄へた。晝間あんなに賑やかだつた此の濱邊の夜はひつそりと沈みかへつてゐた。隣の天幕はまだ蠟燭の燈がほのかに揺れて楽しさうな話聲が聞えて来る。

『まだ起きてるんだな朝は仲々起きないくせに――』と思ひながら天幕をはなれて波打際をあるき出した。

薄墨を流した夏の夜は、月を見る事が出来なかつたが星が一面にまた、き沖の方は腫をこらして見ると水と空との境界が仄かに知れる位だ。波頭が急に白く砕けて足もとに寄せた。何か魔の熊手の先でもすつと差伸べて来るかの様に。何か不安な氣持に押されながら岬の方へしつとりとぬれた砂地を靜かに牽かれる様に歩いて行つた。

唯星あかりだけの此の夜、周圍は眞黒なとぼりが下ろされてゐる。此の濱は、無氣味と云はうか、靜寂すぎる位波音の外は何も聞えない。眞暗がりの所から魔物が密かについて来るのではないか――と思ひぶる／＼と身慄ひしながら天幕に引返したくはなかつた。餘りにも美しい夜だつたから――しばらく歩いて砂地に腰を下ろして銀河のさやかに流れる空を仰いだ。大きな星！ 小さな星！ 數限りもなく空に咲

く眞白な花にも似て。私は空の秘密に幻影を追ふ様な眼をしていつまでも／＼それを眺めて居た。

不圖、沖に目をやると一点二点漁火が見えて時々海の面に薄明るくなつたが又元の闇にかへる。多分獲物を一杯に積んで我が家に歸る漁船だらう。

靜かな夜だ。

遠くの隣村のほのかな燈を目標に歩き出した。

海邊の夜は實に寂しい。

ザアー、ザアー、ザアー。さざなみのくづれる波音の間にサク、サク、サタとしつとりとした砂地を行く足音が靜かに靜かに續いた。

## 僕の家の犬

二年 大 照 完

僕の家にベスといふ犬がゐる。先月何處からか兄さん口ついで來たのである。小さく顔は猿の様で茶色である。しかし賢い犬である。小さい割には澤山食べる。三度々僕と同じ程たべる。そして菓子の入つた罐をあける音をさすと尾をふつて走つて来る。

此の頃は贅澤になつて味噌汁をかけてやつた位では食べない様になつた。しかし家中皆な犬が好で、御飯の時はちゃんられた。のに此の頃はそのジョンが姿を見せなくなつた。何處へ行つたのだらう。家中皆なで心配した。ベスは居つても何だかさびしい。構はずにやつて來ればよいのに。おとなしいジョンと小さいが負けないベスを思ふと、ベスが嫌ひにならぬ。犬同志では仲の悪いものだらうか。

## 夏の朝

二年 島 津 清

まだ暗い。外燈はぼんやりと夜明けの街を照らしている。『今何時頃や。』『さあ四時頃やらう。』『大分冷いなあ。』『うん、あまり喋ると風邪引くぞ。』『大丈夫。』…… やつと郊外へ出た。空一體濃い水色になつて來た。もう夜明も近いのだらう。昭和セメントのネオンの光も霞に包まれて、かすんでゐる。何だか懐しい。

一本の草木も一羽の鳥も生物は未だ深い眠より覺めない。左を眺むれば鈴鹿の連山の頂にそつて藍色の光が現はれた。一分三分三十分と共に薔薇色の光が現はる。冷氣の肌をや、感ずる、總ての物は今眠より覺めんとしてゐる。道端の林の中からギギ、ギギ、ギギと鳴く鳥の音がするかと思へば、他の木の上で「ジー・ミン／＼／＼」と蟬が鳴く農家の傍の鶏小屋の前で三四羽の鶏が夜明けの時をつける。

と縁側で尾をふつて待つてゐる。食事中は犬の話ばかりだ。兄さん等は途中に立つて行つて自分のおかずを興へる。面白いのだらう。又暖があると、庭でお菓子を持つて行つて色々な事を教へる。長い間根氣良く教へてゐられる。そんな時には皆なで見物だ。『を坐り。』『お手々。』『おあづけ。』『伏せ。』ボールを投げると取つて来る。等出來る様になつた。ジョンよりすつと賢い。ジョンは一二丁離れた家の犬である。ペン一來るまでは、日に何回となしに來て、うちの犬と言つてもよい程であつた。しかしコスが來てから殆ど來ない様になつた。遠慮してゐるのだらう。來るとベスは『此處は僕の家だ歸れ』とても言ふ様に『うゝ』と云つて睨む。するとジョンはすご／＼歸つて行く。その後姿がかはいそつてならない。ジョンは大きな犬だ。ベスは半分程しかない。しかもジョンの方が先輩だのに。そんな時はベスを追ひやつてやる。ジョンは弱い犬で、小さい犬と喧嘩してもさう負ける。後から應援してやつても退いてばかりゐる。番車といふ事を知らない兄さんも僕と同じ考へだらう。たまにジョンがやつて來ると菓子でもベスにやらずにジョンにやられる。特に兄さんはジョンをかはいがつてゐられて、道で合ふと夕方暗くなつても飛びついて來るそうさ。僕等は道で合つても少し他の人でもゐると、知らずに通つてしまふが。此の間も兄さんにジョンの話をしたら『そりやジョンの方がよい。』と言つてゐる。

太陽が顔を出してから時をつけを阿呆な鶏も居るものだ。俺が夜明け前を見ないからかも知れないが。

小川の水で顔を洗つてゐる人も二三人は見られた。家々は今起きたのであう／＼がら／＼。がら／＼と雨戸をあけてゐる。未だ電燈がついてゐる。山から出た太陽を数珠で手を合して拜む老人もあつた。老夫婦が鍬をかついでゆく。小鳥は林の方へ飛んで行く。「氣持がいいなあ。」「うん、夜明けはい。これから早起しよう。氣がさつぱりするなあ。」

總ての物が悠長だ。平和そのものだった。都會では決して此の様な風景は見られないし、又そんな暢氣な感じもしないだらう。ッジツジツとタイヤが砂とすれ合ふ。舞臺はクル／＼廻る。少し暑くなつて来た。太陽は青空で笑つてゐる。牛物皆が朗らかに笑つてゐる、歌つてゐる。平和の歌を。俺等の車は走る平和の中を。――

俺は心を打たれた。やはり日本の田舎だ。清々しい、さわやかな、朗かな平和の田園だった、この様な所に住んでりや命が延びる、都會の青瓢箪や神經質な者は出来て呉れと云つたつて出来ないはずだ。最も強く感じたのは老人だ。太陽を一心に拜んでいた。その邊の空氣が一層俺の心を突いたのかも知れないが。正しくその姿は心ある者が見たならば心の底まで清掃されぬ者は一人だつてあるまい。神を佛を信ずる者は世に多くたつて太陽を神として毎日、朝に夕に拜む者は數

少いだらう。まして都會では。……

こんな事が集つて出来ている所だが朗かなのだ。平和なのだ。都會では到底、眞似は出来ないにきまつてゐる。拜んでゐる太陽をレンズを通して、のぞく者がゐるのに。が、しかし出来ない云つても出来るだけ多く眞似をしてコセ／＼した心から少しでも逃れなくてはならぬ。世界中の者が皆、田舎の様だつたならば戦争も起らないだらう。皆が利己主義で通して行かうとするからいやな戦争が起るのだ。……今朝は愉快だつた。心がのび／＼した實に田舎はいい處だ

## 晩 秋

二年 森 東 三

此の頃は日中でも寒さを感じる様になつた。

目が覺めても、なんとなく起き難い。寒さが身にしみ込む様だ。窓から外を見ると、鳥が秋風に翻られて、舞ひ上つては落され、落されては舞上つてゐる。家の中から見て居ても寒そうだ。

窓を開けて顔を出すと、冷たい風がひゆうと頬を撫でて通り過ぎ、枯木が揺ぐ。晩秋の風は木の葉を天高く吹き亂してゐる。山を見ても、野を見ても、いづれを見ても晩秋の景色に色

ざられてゐる。

田圃道をおいてゐると、すぐその兩側から「サク／＼」といふ稻を刈る鎌の氣持のよい音が流れてくる。しばらくそれに見惚れてゐると、わけもなく微笑が催はされる。其の音を聴くと田圃の幸福を私の生命の波心に觸れさせられた様な感じてゐる。

その音こそ 楽しみこそ、この晩秋にあるのである。

私は今、農夫の幸福を心行く迄歌ふのである。

晩秋は楽しい時であり、淋しい時である。すべての者は皆冬の支度に忙がしい。

冬は速驅で近づきつゝあるのだ。

## 太田新聞店の廣場にて

二年 坂 邦 男

七月二十七日午後四時頃、僕は太田新聞店の前の野球のスコアを見にいつた。新聞店の前に着いて、僕はびつくりした。自轉車の多く並んでゐる事、人が黒山になつてゐる事。丁度其の時指示板にスコアを發表するところであつた。皆手に汗を握りしめて隣もせずじつと眺めてゐる。一回兩軍〇、二回も同じ三回八幡商業三点、彦根中學二点、四回兩軍〇の所まで書いて店內へ入つてゐた。皆は「あつ」と言つ

て一言も話さず唯呆然として立つてゐる許りである。其の中に不平を起す者も出来て来た、すると或る一人の若者が大日

方投手は病氣の爲に出場不可能であると言つた。すると又皆は前より一そう呆然とした。然し病氣では無理はなく唯僕は正々堂々と戰つて下さいと心に思つた。

すると又店員が書きに來た。五回兩軍〇、六回も同様七回、

八回のおもてまで零がついた。裏は書かずに入つて行つた。

彦中ファンは唯呆然とするばかり、彦中生徒は固く手を握り

しめてその後を待つてゐる。又不平が起る、然し此の裏で彦

中がもしやチャンスをつかんでゐないかと思つた。二十分た

つと店内一ざわ／＼しかけた。外路に結果を待つてゐるファ

ンは一齊に店内を眺めた。店内から「彦中が勝つた!!」と言

ふ聲が聞えたと思ふ瞬間、あちこちから萬歳／＼の聲が聞え

た、すると店の人が合計を書きに來た八回裏〇点、九回八幡

商業〇点、彦根中學二点と明らかに書かれた。何と云ふ彦中

のねばり強さよ。遂に湖南の強豪八幡商業をおさへて京津大

會に進み京都の強豪平安中學と對戦するのだ、行け彦根中學

野球部よ正々堂々と戦へ。

間もなくファンは喜びいさんで歸つて行つた。

## 窓外の景色

二年 樋口 芳朗

「窓から外を見ると、日増つに伸びて行く樹々が見える。勉強に倦んだごんよりとした眼で、その滴りさうな縁を眺めると、自然に目を和け、心に生氣を注入して呉れる。さうして風がそよ／＼と吹いて来ると、芳しい緑葉の香がつんと僕の鼻を突く。あの夏の暑さに拍車を掛けるやうな蟬の忙しい聲を緩和するのは、此の清新な緑葉と、人を物思に沈ませやうな涼風とである。」

「空には夏に附物の入道雲が所々に青空を覗かしながら、ぎつしりと構へてゐる。じつと其れを眺めてゐると、まるで御伽噺の國にある巨人の住んでゐる島のやうに思へる。かと思ふと何時の間にか羊の群のやうになつてゐる。入道雲だけで立派な詩を作る事が出来ると思ふ。僕は何時も處が空高く氣持よさそうに飛んでゐるのを見ると、あゝいふ風に飛んで行つてあの怪奇な巨人の島を探検したり、羊の群と一緒に遊んだら實に愉快だらうなあと思つてゐる。」

「雲の下には鈴鹿の連山が蛇々と連なつてゐる。その水色も又趣ある色で其下に見えてゐる彦根近郊の禿と比べると實に愛すべきである。一條の黒煙が長く、細く棚引いてゐるのは昭和セメントの煙であらう。」

しるされて居るのではなからうか。或る恐しさが戰慄をともなつて襲つて来た。僕は砂にひざまづいた。何者かに斬らなかつては居られなかつた。……僕は反省せずにはおられなかつた。そして強い決心と希望とを得た。山はいよ／＼黒く松の影は濃くなつて来た。松林の家には明るい燈がつけられた。開放された様な快さを得て松林の細い道を家路についた。振り返れば湖面には小さい波頭が見えて、風の音が松林にさみしくひびいて来た、月見草が夕闇の中に淋しく、たそがれ時、それは人生に反省と希望を與へる聖なる一時ではなからうか。

## 湖周大崎行き

二年 草野 文平

八月五日。今日は家族揃つて、大崎までドライブだ。田は青々と廣がり山は天の一角に聳え立つ。天氣は暑くもなく、雨の心配もないドライブには、絶好の日和だ。

遽で、姉川にさしかゝつた、川の水は澄みきり澄々として下へ／＼と流れて行く。虎畑、高月を通り過ぎて、木の本に來た。其所で國寶で名高い、木本地藏様にお参りをして、大崎へと向つた。道路には大石小石が轉り出て、車内が左右に揺れ動く度に、心臓がぎ／＼と大きく脈打つてあつた。

「もうさつきの入道雲は一面空を掩つてしまつた。今まで照つてゐた太陽も其の眞白な着物の中に身を包んでしまつた心なしか蟬の聲も細つたやうである。きつと今にひびく夕立がやつて来るのだらうと思ふ。」

「八月も数日過ぎた此頃は、野を見ても空を見ても、一杯に眞夏の色が漂つてゐる。」

## 湖岸に立さて

二年 中村 光信

たそがれに濱を歩む。眞黒の漁師が松林の中に綱をすいて居た。僕の足元に泡を吹きながら、小がにが集まつて來る。ビホードの様な湖面には波一つない。水平線の彼方の空は紫色に、對岸の山はうすすみに、傍の松林は濃緑に、砂濱には松の影が黒く、總てが静寂と沈黙の中にあつた。僕の歩む足音のみがその静けさを破るのだつた。

「静」と言ふ言葉のひびきを今さらなつかしく思つた。松林のつきる所に月見草が群り咲いて居た。薄黄色なその色は静かなたそがれ時に好い調和を見せて居た。僕は「ふと」後を振り向いた。歩いて來た足跡がはつきり残されて居る。僕ははつとした。

今まで歩いて來た、人間の道も何かこゝろしてはつきりと

途中で、あまり他の自動車に出合はないのを思ふと、琵琶湖一周の自動車も餘程減少した事が窺はれる。急に眞暗になつた。長いトンネルに入つたのであつた。間もなくトンネルを出た。右方を眺めると、あまりの風光のよさに「あつ」と叫ぶ所だつた。竹生島が見え附近一帯は山に圍まれ、海は銀河の如くきら／＼と光り輝き其の風光は實に筆舌に盡し難い。私は是程山と海とが融合して絶景を成してゐる所は、ちよつと餘所で見ると、實に風光明媚な所である。山に登り遙か彼方を見つめると、汽船が波を蹴つてこちらへ進んで來る。其の飛沫が四方に散る度に、日光に照らされて白銀の如くきら／＼と光つてゐる。其の美しさは實に何とも云はれない。此の大崎も、長年の苦心の結果、世人に知られ、又琵琶湖の絶景として賞め讃へられる様になつたのだ。

私達は彼方此方を見物して、鹽津の親戚の家に行き、レコードをかけるやら、近くの小川へ魚を釣りに行くやら面白く遊び、夜七時頃夜風に吹かれながら歸途についた。

## 伊吹登山之記

二年 河崎 敏男

八月十四日午後十一時バスに揺られて、伊吹山に向ふ。空には星が寶石をちりばめれ如く輝いてゐる。「明日の天気は晴て一時霧が深くなる」といふ、「JOCKからのあまりよくない放送だつた。」

登山姿も軽々しく麓の神社に過なき様にと祈り、其處から頂上へ向ふ。懐中電燈一つを頼りに歩く。樹にかこまれてゐる上に、九十九折でなかなか登れない。早や「ふう〜」。『ふう〜』といふ聲、或ひは『まだ一合目でないのか。』等と尋ねる聲を耳にして、やつと一合目に着く。二合目まで力を出して、ぶつ通しに歩く。二合目で少し休んで、三合目四合目と歩みを運ぶ。五六七合目は坂が急だから登るのに困難だ。しかし自力に我慢を重ねて、やつと八合目に着く。そこで石にしばらく腰をおろして休む。まだ午前二時頃だ。現しさを通りぬけて少し寒氣を感じる。八合目から九合目にかけては岩がごつ／＼としてゐて、道が大變けわしい。その上急坂だし石にかじりついてとろ／＼九合目につく。九合目からは道はゆるやかだけれども一面が覆はれてゐる。とろ／＼我等の目的とする頂上へ、午前三時十五分につく。その時は二回も征服したうれしさで、一つはいだ。それから茶屋に入

る。

茶屋の中はガス燈がともされて、電氣と同様に明るい。其處で食事をとる。まだ日の出には間があるので、父と共につかれた体をやすめる。ガラス窓の外は、深い霧に覆はれて白色だ。登山者も大分登つて来たらしく、人々の話し聲がやかましくなってくる。茶屋で繪葉書を買ひ、友達に伊吹を征服したことを知らせる。それから集印帖に記念スタンプを押す。一時間餘りたつてから東の空がほんのりと明るくなつて来る。それから霧の中を、あちらこちらと歩きまはる。又茶屋に歸へつて、一休みする。日の出すこし前に茶屋を出て、東の方に行く。昨年は岐阜の町や其の他至る所の、景色を眺めることが出来たが、今年は少しも見ることが出来ないのは、遺憾だ。日の出は五時十分だそうだが、其の時刻となつても、太陽は顔を出してくれないので、拜むことが出来ない。少し待つてゐるが、五時半過ぎに、珍しい花を採集して、下山の途につく。霧の水氣で道が／＼だからすべるまいと氣を採んで歩く。歩みを續けてゐる間にも、珍しい花を採集する。九合目を過ぎて、八合目を歩いてゐる時に、折からの霧が風にあふられて、遙か向ふを西に動き、一面霧につままれてゐた山麓が、美しく箱庭の如く見え、その上に、太陽が顔を出したのか、下の山々が明るく日の光に照らされてゐる。あゝ！何んと美しい事だらう。霧が風にあふられて、西に消え行

く様。消え行くと同時に右や左の山々が、繪の様に浮び、又脚下に広がる景色は、雄大といはうか、豪壯といはうか、實に筆や口には盡されない。さこからかホーホケキヨと、鶯の可愛らしい聲が聞へて来る。僕等より先に下りてゐる人々の口から『惜しい事をしたなあ、もつと頂上にゐたらよかつたわい。もつべん登つてこか。』といふ江州獨特の聲がもたらされる。僕も惜しい事をしたとは思ひながらも、又下山の途につく。四合目まで来て、あたりをながめながら一休みして、にぎりめしに舌鼓を打ちながらたべる。其處をカメラに収めて／＼と又下山の途につく。その時にはもう太陽は薄墨色の雲に邪魔をされてゐた。風も吹いて来た。少し足がつかれて来た。また歩いて一合目の廣い所で休む。草の上へごろんと寝轉んだ。それから山麓の神社につき、無事に伊吹を征服した事を深く謝し、春照村に向ふ。昨夜バスを降りた所で待つ。しばらくするとバスが来たので、午前九時十分頃に、伊吹山に名残を惜みつゝ出發、午前十一時頃無事歸着した。

## 敦賀灣

二年 松田 又一

敦賀の灣岸には到る處に名勝が多い。殊に金ヶ崎や常宮は多くの歴史物語を残して居る。金ヶ崎には後醍醐天皇の皇子

尊良親王、恒良親王をお祈りした金ヶ崎宮があり、又新田義貞が兩親王を擁護しまいらせて、足利の軍勢と戦つた處即ち金ヶ崎城趾が有る。私は此處へ来る度に、悲憤の涙が湧き出て来る。金ヶ崎からその後にある金ヶ崎城趾へ行く途中に鷗ヶ崎が有る。青い波の上に突出してゐる様な美しい處、敦賀全景が一目に見え、更に遙か向ふの山々や、沖の青々とした波の上に浮いし見える白帆の光景が壯麗に眺められるよい處である。嘗て昭和八年十月二十九日には畏くも、今上陛下が此處で此の絶景を御展望あそばされました。金ヶ崎の西にあるのは有名な敦賀港、日本海での最良港で、四十時間露西亞の浦鹽斯德へ行へ事が出来、又朝鮮との間に汽船の便がある更に其の西には幾千本とも數知れぬ松の木の前即ち松原公園が有る。青い松林、白い砂、打ちよせる波、美しい濱邊……とても氣持のよい公園である。此の公園は實に私にとつて、感謝すべき公園である。此處には大きい運動場が有り、毎朝私は此の運動場へ運動をしに行く。走巾跳、三段跳、機械体操、ランニング等が私の心を引きつけて、雨天以外は必ず一回は出掛けた。又松林の邊の新鮮な空氣が格別だ。それがためにめき／＼健康を増進して、風邪一つ引かなくなつた。眞に恩ある公園と云つてよからう。公園の少し南の方に松原神社が有る。此處には忠臣武田伊賀守（耕雲齋とも云ふ）外四百十名の方々が祀つてある。此の松原神社の近くに武

田耕雲齊外四百四名の墓がある。それから松原公園から一里許り離れた兩岸にある常宮と云ふ處は、二三度行つて見たが大層景色のよい處であると思つた。五米程の灘が有るのが私は氣に入つた。瀧にうたれるのが何よりも一番面白い。之と對岸の東岸には丸山と云ふ處が有る。此處には鯛ヶ島が有つて、島が鯛の形に似てゐるから、多分斯様な名が附いたのであらう。丸山は風光明媚で、海は遠淺、眞に海水浴にはよい處である。然し何分にも離れ村で、不便もあるから、割合に人は少い。惜しい水泳場だと思つた。

その外まだ景色のよい處が澤山あつて、私はそれらに大層心を慰められ、愉快に楽しく過した時を思ひ出しながら、今此の原稿を認めて居るのである。

## 龜

二年 西島 寅次

昨日表で近所の人々が雨の降るのに立ち寄つて、『何處の龜だらう。』『御芳さんの龜らしい。』と噂して居た龜が、今日は僕の内に舞ひ込んで來た。本當に不思議な縁である。

側で睨み著けてゐると、手足も出さずに、蝸牛の様に萎れてゐて、誠にかはゆらしい。併し少しでも其の場を退くと、龜はほつとした様に頭を出す。續いて手を出し、足を出して

物が、微に見える、思はず『卵だ。』とときやうな聲を上げた。觸つて見ようかと思つたが、潰れてはかわいそうだ、と思つて、じつと見てゐた、確に卵だ。圓い。早速皆を呼んでこようと思つて、駈けて行つた。お母あさんも『ぎれ／＼拜まして。』と言つて走つて來られた。皆んなが、『お拜ましてや、』と言つてぎつと笑つた。併し母は一所懸命で、『萬年も生きる龜が内に巢をかけたのだから、何と目度たい事があるのやらう』と言つて喜んでをられる。側で親龜が、笑つてゐる様に首を少し縮めて此方を向いてゐた。

## 多賀詣で

二年 宮戸 弘

彦根驛から多賀行の電車に乗ると十五分多賀驛に着く。二三臺の人力車が大社行のバスに交じつて客を呼ぶのもむしろ趣がある。參道の兩側に軒をならべてゐる店々からは名物糸切餅お多着杓子のお土産をと、通る人々に呼びかけてゐる。右に折れ左に折れて行くとしばらくして、新しい石の大鳥居の前に出る。その傍に東郷元帥の書かれた官幣大社多賀神社の立て石がある。

古風な反り橋を左に見て門をくゞる。幾百年の年を経たと思はれる老杉の木立を背景とした神殿は自から人の襟を正さし

方向を定めず、早く逃げようと歩き出す。嘗ては兎との駈競で勝つただけあつて、割に早い。『是では兎が寝てゐたら勝てるなあ』と思つた。その歩き方は、手足を外側に張り出していよ／＼と、言はんばかりに歩き出す、急にぐつと抑へてやると、吃驚した様に、しゆうつと音を立て、手足をひつこめて、何故そんなに怒るのだらう。怒らなかつたら、悪戯もしてやらないのになあ、と思ひながらも何度も、何度も抑へてやる、仕舞には用心して、仲々出さなない、随分警戒してゐるものである。餘りいぢめてやるのも可愛想だから、少し離してやると、喜んで大急ぎで歩れ出す。やがて砂地の所へ來ると、安心した様に留つて、何かしら考へ込んでしまつた。暫くして何を思つたのか、緩と後足で砂を掘り返し始めたおや／＼と思つて僕が近づくと、直ぐに止まる。離れると又掘り返す、何をやるのだらうと見守つてゐると、ぎん／＼と何處迄も掘つて行く。やがて自分の身体が入る位になると、漸く止めて、じつとした。僕は不思議でならない、病氣なのかしらと思つたので、皆を呼んで來た。兄さん達の暫く見てゐるが『卵を生むのだらう。』と言つておられた。

半時間の後、再びぎうしたのだらうと思ひながら、龜の所に來た、すると先迄あつた掘り穴が見えない、よく見ると今被せた許りの様な所があつた、さては龜の仕業だな、と思つて少しばかり掘り返した、すると下の方、に白い光澤のあるめる。むく／＼と湧き出てゐる御手洗の清水を手には注ぎ口を嗽ぎて、恭しく拜殿の敷石にぬかづきて拍手を打てば森にこだまして、身も心も神代に戻る心持ちがする。木の香も新しい社殿の前に、聖上陛下をはじめ各宮様方からの御下賜金の立札も畏き極みである。

社務所の前に玉垣をめぐらした中に壽命石がある。これには僧重源が東大寺建立の勅を奉じてこの多賀の宮に延命乞ひその目的を達して御禮参りをしたと言ふ物語りが傳へられてゐる。

世にこの宮を壽命神と言ふのはこれから出たことであると聞く。

## 晝

## 寝

二年 河合 哲雄

座敷で晝寝の時に仰向に寝て何の興も無い天井を睨んでゐると天井の木目が人の顔に見えて來る。一つの節穴が人の眼のやうに見えてその周囲の木目が不思議に顔の輪廓を形作つて居るのだ。その顔が始終目について氣になつてしようがないので今度は右向になつて横に寝ると襖にある雲形の模様が天狗の顔に見える。如何にもうるたいと思つて其の顔を心に打消して見ると襖の下すみにある何かのしみが又横顔に輪

廓をなしてゐる。仕方がないから試みに左向に寝て見るとガラス越しに見える、松山が見えてその松の間に向ふの空がすいて見える。そのすき間が人の顔になつてゐる。

丁度繪探しの繪のやうで横顔のや、逆になつて見えるのは少し風變りだ、再び仰向になつて今度は顔のない方の天井の隅を覗んでみると、馬鹿に大きな顔が忽然と現れて来る。此の外に心の穴に鬼神を書き空中に樓閣を作るのは平常の事であるが、晝寝にかぎつて人の顔が現はれたのは今度が初めてである。

## 伊崎の棹飛び

二年 松本 信雄

『ボン』『ボン』『ボン』と、エンジンの音も賑はしく我等一行を乗せた舟は波を蹴つて進んで行く。今日八月一日は、全国唯一の豪壯な奇習を誇る蒲生郡島村字奥島崎耶山の嶮崖から盛大に行はれる、伊崎の棹飛びの有る日である。長さ十三間餘の巨材を湖上はるか十二文の所から突出して、さながら別天地の様である。僕が『船頭さん、此の行事の由縁を聞かせて下さいませんか。』と言ふと船頭さんは、四角ばつた聲で、『そも／＼、此の行事の初めは空の鉢を棹の頭につけて湖上を通る舟から金品の喜捨を受けて御堂を立てる資本

を集める爲にした事から事が起つて出来たもので六百餘年の歴史があるだけに、大したもの、おらも坊ちゃんぐらゐの時には善く飛んだものだ』を思ひ出深く言ひ、そして、さらに『坊ちゃんお前も飛んだらさうだね。』と云つた。此の船頭さん、今は年老いてゐるが、僕等の頃には、棹から飛んだ者らしく、筋肉隆々としてゐる。關西・關東の各地から集つた筋骨隆々たる若人の健康美に輝く、全裸の若人、數百名が色々の妙技をふるつた様は、實に筆言につくしがたいものであつた。

虫の音の秋風につて聞ゆかな。

## 湖岸の一日

二年 野村 實

僕は毎年夏休には叔母の家へ避暑に行くことにしてゐる。叔母の家の裏は直ぐ青々とした水を一杯湛へて日本一を誇る湖、琵琶湖に續いてゐる。

湖の朝！湖の朝は『陽氣に元氣に生々と。』の標語をそのまゝに、實に潑刺たるものだ。雞が鳴く、波の音が聞える。僕は顔を洗つて濱邊へ出た。靜かな美しい湖にはさゞ波がはしやりばしやりと波打際を弄んでゐる。今朝は何時もと違つて朝霧が少しもかゝつてゐない。多景島が何時もながらの姿

をはつきり見せてゐる。誓の御柱は、日輪を受けて銀と輝く臺石の上に高く突立つて、五箇條の御誓文を思ひ出させ、明治大帝の御聖徳を追憶させる。多景島の左手には竹生島が優雅な影を浮べてゐる。彦根では竹生島は多景島の右手に見えるのだが、此處ではその反対である。正面には此處にも沖の白石が日光を受けて青色に輝いてゐる。南の湖上には沖の島が半島の様に見える。丁度その方向から一集の漁船が波を突き切つて歸つて来る。叔母の話では、朝の三時頃に蜆取りに出かけた歸り途だと云ふことだ。あの船には僕位の海男子も乗つてゐることだらう。太陽は次第に昇つて来る。こうして湖畔の朝は平和に明けてゆく。

湖の晝！湖の晝は僕等にとつて一番楽しいタイムである。僕の頭には水泳の外には何物も無い。然し濱邊に飛臺一つ無いのは寂しい。僕の外にも數人泳いでゐる。皆眞黒な丈夫さうな体の持主である。禪もしめてゐない者がある。總べて田舎らしい平和な風景である。僕は何時も従兄弟と泳くらをやる。僕は水泳には十分自信があるのだが、此處では聊か苦戦を免れない。對岸には松並木がはつきりと見える。其處には入道雲がむく／＼と盛り上つてゐる。丁度隣りのボチ公の様だ。右手の方には伊吹山の、雲に上半身を占領せられた哀れな姿が現れてゐる。

湖の夜！湖の夜は風景文から考へて見れば一日中の随一た

らう。夕には空には銅の雲が輝き、水にも紅の雲が輝いて、上下相映じ眞に口や筆で盡されないとはいふことを云ふのであらうか。西江州の山々には墨繪の様に連なつて見える。

比良の連山であらう。山麓には二三の赤い灯が寂しさうに瞬いてゐる。柳川の方を見ると、棧橋が黒い影を水に寫して横たはつてゐる。其の先端にも灯が輝いてゐる。その灯にも悲しみが一杯籠つてゐるやうだ。天には月が晃々として輝き水にも月がさゞ波に弄ばれてゐる。眞に湖の女王とても名づけたいやうな美しさである。右の方に琥珀の様な光が点々と存在してゐるのは長濱の町か、將た彦根の町か。不圖見ると多景島の方から遊覧船がやつて来る。柳川の棧橋につくのであらう。しばしその行方を見守る。秋なら今頃は虫の音が聞える頃だらう。何時の間に出たのか湖上にはボートが泳いでゐる。はしやり／＼とオール音が聞える。踵を廻らして月光に雪と輝くと言ひたいやうな砂を踏んで家に歸る。今夜はこんな平和な夢を見ることだらうかと思ひながら。

## 初秋の田園

二年 西田 洋次郎

雲の多い早い空、所々に眞黒な雲さへある。灰色の雲に包まれた山もうすら寒い。足下にはトマトや南瓜の赤茶けた残

りや、玉蜀黍の枯れか、つたのがある。

風が吹く毎に稲の波は何處迄も續いてゆく。それにつれてポブラや竹藪がさわぎ出す。遠くの山の端を渡り鳥らしい鳥が群をなして飛んで行く。

日は有るか無いか解らない程薄暗い。まるで夕暮の様だ。

何物も黒い。併し東の山はそれでも明るく水色だ。千鳥ヶ丘は形だけが黒く見える。光るものは黒雲の僅かな破れから見える高い白雲だけである。山の背を綿の様な雲が昇つて行く伊吹山も登山した時こんな天気だった、と思ひ出して見えぬ伊吹山に目を向ける。

北の方が黒い雲の上を渡つて日光でやつとクリーム色になり始めた。前よりいくらか明るい。風が吹く、鳥が鳴き出す私は此の寂漠たる初秋の田園の中に、肌寒い風を浴びつゝ、獨り立つてゐた。

## 養老の瀧まで

二年 北川 鐵男

東の空が薄赤くなつて、あちらこちらの農家の小屋から雞の聲が新鮮な空氣の中を通して朗かに聞えてくる。僕は父と共に自轉車で養老の瀧へ行く仕度をして元氣で我が家を出發した。

は元氣よく家を出た。僕は昆虫網をかついで先頭に立つて、土手の朝露をふみしめて進んだ。土手を離れて野道に入る。目をさへぎる物がなくなり暑さは益々激しい。田で働いてゐる人々がちらちらとこちらを見る。野道も過ぎて山道にかゝる。涼氣を求めて木蔭に立寄つたがわづかの風さへもない。氣を腐らして又歩む、河内まで二里半程もあるのに、未だ半里ばかりより歩いてゐない。氣を引しめて又歩を早める。

傍らの芹川の流がわづかに涼氣をもたらしてくれる。栗柄を過ぎると山道は益々急だ。蟬の鳴聲の近いのに、歩は自然に遅れる。傍から「ガイドノ」後になつてはだめだだめだ」とからかはれて一面怒りながらも誇り氣に追はれて再び先になつて進む。五人中で風穴を探ぐつたのは僕だけだ。小學校の時からこれで三回目なのだ。ひらくと大きい黒い蝶に舞つてるのを見た僕は、昆虫網を持つて駆け出した。「やつ」と氣合を掛けて蝶を網の中へ生取りはくくして瓶の中へ入れた。向ふからがら／＼と車に薪を積んで山里の人が出て來た。人々は今夏の日の下で、冬にそなへて一所懸命にかせいでゐるのであらう。毎日／＼遊び歩いてゐる僕は思はず頭を下げる。何處からかそよ風がすう／＼と吹いて來た。緑は夏の山をうすめてゐる。その中に赤・黄の美しい花が点々と咲いてゐる。木々の上では蟬が我もの顔に鳴き競うてゐる。はあ／＼と息をつきながら山道をたぎる。もう一里半は歩いた

米原から養老までは約四十軒程ある。僕等は山の中を通り田圃通り、森や林や草原の中を通つて、養老へ向つた。朝日が山の蔭から、キラ／＼と明るい光を投げて、すみ／＼と明るく照らした。足の動きて自轉車は一輪一輪と風老へ進む突然空は黒い雲に閉ざされて、烈しい俄雨が降り出した、僕は「もう養老へ行けないかしら、歸らうか」と獨り言を言つて附近の家に雨宿りをした、幸ひ雨がかりりと休んで、雲間から朝日が照り出した。地面は雨でじ／＼としてゐる所が日の光で眩しい程反射してゐる。自轉車は休まず進んでゐる上り坂があれば下り坂あり、下り坂あれば上り坂あり、まるで諺の「苦あれば樂あり、樂あれば苦あり。」のやうだ、太陽はキラ／＼と照つて體から汗がにぢみ出し初めた。次第／＼に路も人馬の通るのが多くなり初めた。最早眠前に高田の町が見え出した、高田から養老は遠くはない、僕は元氣を出して養老へ走つた、間もなく四五分て養老へついた。

米原から四十軒の路も二時間半で、なんなく養老の瀧に到着する事が出來たのだつた。

## 風穴の探勝

二年 中川 恭二 郎

夏の朝日は晃々と輝いてゐる。兄や従兄等と共に一行五人

ぞらう。其處にあつた橋の手すりにもたれて一休みする。下を見ると、川幅は狭いながらも深い／＼眞青だ、其の中を幾十匹といふあゆがす／＼と泳いで行く。中に二十軒もあらうかと思はれる様なものもある。水筒の水も後残り少い。再び腰を上げて一行は元氣を盛り返して進む。九時頃だらう。芹谷の小學校を過ぎさん／＼進んで行くと、時々山里の人が車をひいて行くのに出合ふ。空は青く澄み渡り、山は緑に包まれ、水はごう／＼と白い泡を立て、走つてゐる。昆虫採集の瓶をのぞくと蝶で一杯である。處々にハイキング案内の立札が立つてゐる。高く山上を望めば階段式の畑がず／＼と續いてゐる。あんな高い所で山の人々は野菜や桑等を栽培するだらうか。右に在に幾多の屈曲を過ぎてぐん／＼進む。相當疲れ來た、皆がまだか／＼と言ひ出した。一番小さな歩く事の自慢な僕は疲れを見せまいとして懸命に歩をかよはす。皆の口数が次第に少くなる。こんなに遠かつたらうか、途中にお寺があつたはつだが、と、僕も心配になる。上衣を肩にかけ、水筒を口にあてながら行くと、兩側の家の人がちら／＼と見る。もう話す元氣もすつかりなくなつてもまつた。見えた／＼待つに待つてゐれお寺が、「お寺が見えたよ、もう少しだ。」と叫んだら皆の足が急に早くなつた。リツクルツクをゆづり受けた僕の足は自然遅れる。負けたら大變だとばかり大いに頑張り、足をひきづり／＼トツプを取り返す。



ラストヘビーだと一所懸命に歩いた。来た／＼とうとうがた／＼に朽果てた橋を渡つて其處の休憩所に腰を下してほつとする。十時過ぎだ、二時間餘りてこれだけの行程を道破したのだ。

ごう／＼と渦巻く水の上を一本橋によつて渡り石灰岩のごろごろしてゐる坂途を上り切ると、ある／＼木の門が開かれて其の前で二人の青年が辨當を食つてゐる。中から冷い風がびゅ／＼と絶間なく飛び出して来る。思はずぶる／＼とふるへた。松明に火を點していよ／＼入り出す。一人二人亀の様にはらばひになつて入つて行く。僕は一番後に松明を手に入つた。急に体は冷えて来る。眞暗だ、其の中に輝く一つの松明と一つの電燈。ごう／＼たる流の音は穴に反響して我等の耳をつく。神祕！無氣味さを湛へた神祕。高い天井を見ればきらく／＼と松明に輝き、ぼた／＼としづくを落す。そろ／＼と奥へ進む。あ、恐しい自然の力たゞ驚嘆の他はない。三回目の僕も又新しき驚嘆に打たれる。次第々々に奥へ進むあ！行く手に大きな石の壁が横たはてゐる。途が違つたのかやう／＼横に途を見出だして又進む。わづか五人の呼聲・感嘆の聲が強く岩壁響く。あつた／＼二階へ上る梯子が。今度は僕が一番に上る。長い梯子だ、『こんな長い梯子を唯が持つて入つたらう。』等とくだらない事にも感心しながら又二階の探險だ。松明を兄に渡した僕は手さぐりて進む。廣

## 久々子の朝

二年 安樂良次

久々子村は前に廣々とした若峽灣を控へ、後に繪具の縁を流した様な高山を背景にして、日中何時も日本海を渡る潮風が私の顔を拭ひ言ふに言はれぬ景色だ。私は朝早く起きて渚を少し散歩した。夏休を利用して彦根から父と此の濱に遊びに來て二日目だ。朝の海は静かだ、底が見える位良く澄みきつてゐる。前方には鱸釣から歸りらしく十四、五隻の小さい漁船が大漁だとばかりに岸に堂々と船を近づける。空は久しぶりの日本晴で誠に朝の景色は絶景だ。砂濱は非常に廣くて美しい、又其の砂が白砂だ。塵を知らない清い空気を胸一杯吸込む。

間もなく灣に突出てゐる小さな半島に來た。水々しく青々とした松が半島一面をおほひ梢は潮風を受けてゆら／＼と揺れる。其の梢の間を通り過ぎて私の顔に當る。『あ！何んと良い心持だ。』其の半島の中頃に三四軒の洋館建の家がある。

一つは眞赤な屋根、一つは眞白な屋根、それ等が一きは目立つて見えるそれは皆別邸だつた。

一米餘幅の山道を上つたり下つたりする右を見れば幾ヒロとも知れぬ海だ。海は青く晴れた空を寫してゐる。たう／＼

こ／＼穴の中にわが一行五人だけと思ふと、急に心ぼそくなつて來る。元氣をつけて又進む。わづかに體の通る様な狭い廊下の様な所、四つ逼ひになつてやうやく通れる様な所なき二階からは別にはつきりした限界のない所に勝手に三階四階と名を附けて進む。處々に色々の署名が照し出される。姓名を書いたもの、學校名を書いたもの、中に飛行機が書いてある。八日市の飛行隊でも來たのだらう。盡きるが如くにして又開ける岩の途。松明もはや半分近くも燃えた。いよ／＼心ぼそくなつて踵を返して歸る。歸り途は興味も少く、煙にむせながら一途に出口に向ふ。ごう／＼と言ふ嵐の様な音は我等が心臓を寒からしめぬ。出口近くてわづかに岩の間に出てる水を見付けた。手を突込んでじつとしてゐると、冷い／＼手が切れる様だ。松明もあとわづかである。入口にわづかに入る日光。又四つ逼ひて外に出る。『あ、美しい』思はず聲を發す暗黒の世界から出てながめた、日光に輝く山の縁は格別だ。しばらくうつとりとしてあたりを見渡してゐた。

皆出終つたので後に心を残しつ、山を下つた。山を下り切つた所激流岩を打ち、白泡四方に飛び、見るも爽快な處で、水筒に水を詰めて、休憩所に歸り、書辨當を取る爲又川上に向つた。

果て近く來た、其所には秋の木が澤山榮えつけてある。此所へ秋に來れば秋の花が咲き亂れてまた格別だらう!! 近くに桔梗の花が一輪咲いてゐる、名に聞く御大師様に來た。視線は前に注がれた。巨岩が壁に横たはつてゐる。其の下には穴があつて突きゆけてゐる、小さな舟ならば通れるだらう。御大師様に一心こめて參詣した後、近くの岩に腰を下して此の良い景色に見とれた。同時にかういふ景勝の地に連れて行つて下さつた父に感謝の念で一杯だつた。

## 夏休中のこと

一年 平井昌吉

僕の家へ毎日注文を取りに來る、魚屋さんが、毎年夏休になると、僕の家の子供等や、近野さんの家の子供等を舟に乗せて水泳に連れて行つて下さる。今日は其の嬉しい日だ。昨日から案じて睨みつきしてゐる空には雲一つ無く、上天氣である。僕はすっかり嬉しくなつて了つた。

さあ出發だ。子供許であるから、小父さんが舟を漕いで下さる。ぎ／＼と、舟は靜かに湖上を滑つて行く。いかに静かな景色に、僕はうつとりと見とれて了つた。向ふの道には、水泳に行く人だらうか、手拭を振り振り歩いて行く。向ふ側の岸に、小さな男の子が無心に浮子を見つめてゐる。

廻轉橋を通つた瞬間、ひんやりした風が吹いた。廣々とした湖に出た。今日見る湖は、なんだか何時も見てゐる湖と違ふ様に思はれた。悠然と落著いた、渺茫とした湖を見て、胸のすく様に思つた。やあ！もう水泳場へ来た。美しい緑の松、白い海濱の砂は、太陽の光を受けて光つてゐる。その中に赤青、黄色とりざりにお花畑の如く人々が散らばつてゐる。沖の方には、白いヨットが帆を立てて氣持よささうに走つてゐる。さあ、此から愈々泳ぐぞと思つたが、未だ深さうて入れさうにもない。兄さんや姉さんは、早や水着に着換へて、ざんぶとばかり飛込んで、すうーすうーと泳いで行く。あまり羨しいので、僕も眞似して飛込んだ。兄さんはもう飛込台に向つて泳いでゐる。「ようしー僕も。」と後を追つたが、台まで泳ぎ着く自信は全くない。何分背が立たない所なので、死にもの狂ひでやつと台側で泳ぎ着いた。はあーはあーと、息が切れさうだ。此所まで来ると、一かきの水練者に見えるので、僕も台の側ですうーと泳いだ。台を離れた途端、上からはちやんと飛込んだ人があつた。附近一帯は、波やら飛沫で一杯になつた。僕はびつくりして、も少し沈みかける所であつた。水を鱈腹飲んで了つた。鼻に水が入つて、實に變な氣持である。附近の人はあまり僕を上手だとは思はなかつたらう。眞夏の太陽は、早や頭の眞上に来てゐる。やあ！もう晝だな。道理で腹がへつたと思つた。僕は腹を脹ます

べく舟へ歸つた。

## 汽車の旅

一年 中 津 孚

「ゴー」と汽車は鐵橋を渡つてゐる。僕達のこの長い休暇を楽しく遊ばせてくれた小濱を發車してから一時間あまり、敦賀近くで霧進してゐる。見下すと白砂の中を貫流する清水あたりは白熱空を焼くが如くであるがその清水たるや夏をよそなる別世界である。稻は大てい黄金の波をうつつてゐる。あたりは暑くともこれを見るとやはり秋めいてゐる。空は澄みきつて小さいちぎれ雲がういてゐる。遠くの岩に日本海の荒浪があたつてゐるのか白く見える。木立の鬱葱としけつてゐる山間にか、つた、山から蟬の聲が聞えて来る。すつかり秋の蟬だ。木立の色が車内に反射してゐる。これも秋だ。また鐵橋だ!! 川の一方は水に侵蝕されて赤い地盤が表はれてゐる。そしてそこには清い水が淵となつてうづをまいてゐた大へん氣持がよかつた。しかし汽車は一向かまはず走つてゐるしばらくすると白い壁の兵舎が見えてきた。汽車は今敦賀驛に近い松林にさしか、つたのである。

## 本校入學の喜び

一年 向 坂 正 勝

入學だ。何と言ふ嬉しい事だらう。思へば二十九日、控室に貼り出してある番號を見に来た時、第六十八號と出てゐた時には、飛立つ程嬉しかつた。「嗚呼、今の此の瞬間からもう中學生だ。もう小學では無いのだ。あのむづかしい試験を見事に突破したのだ。」かう思ふと、あの制服・制帽の立派な中學生の有様が、まざ／＼と目の前に浮んで来る。

家へ歸つて「合格。」と家の人に言つて時には、皆愛の顔をさつと輝やかして一言、

「お芽出度う。」

と言はれた。後は嬉しさでもう何もおつしやらない。直ぐに御馳走を買ひに行つて祝つて下さつた。隣の人からも、「お芽出度う／＼。」と言はれると、嬉しい様な、恥しい様な氣がしてならなかつた。

翌日、先生の所へ御禮に行つた。先生は僕のにこ／＼顔を見られると、忽ちにな／＼しなまつて

「お、お芽出度う。もう立派な中學生だ。學課も一段とむづかしくなつたのだ。こんな事位にへこたれないで、身體を丈夫にして偉い人になつて下さい。」と教訓して下さい。僕はあの教訓が今でも頭から離れな

い。

それに上級生は皆親切にして下さる。汽車の中でもちやんと場を取つておいて腰を掛けさせて下さる。

嗚呼！何と言ふ幸福な、又、親切な學校に入學出来たのだらう。僕はあの入學出来た喜びを忘れないで、一心に勉強して天晴な帝國臣民の一人とならう。

## マ ラ ソ ン

一年 長 谷 曉

此處は芹川の堤である。前の方には數十人のマラソンの勇士が快走してゐる。僕は天西君と一つの手拭を食へて走り續ける。暫く走つて行くと、松田君が苦しさうに、喘ぎ／＼走つてゐる。僕は松田君に、「頑張れ！／＼。」もう半分以上は走つてしまつたのだ。」と、元氣を付けてやると、「僕はもうあかん。」と、云つて走つてゐた。左側の田圃の稻も少し揺れて松田君や僕等に「頑張れ！／＼。」と、應援してゐる様に思はれた。僕は又元氣付けてやつた。併し松田君は、とう／＼後の方になつてしまつた。

黄色のチテーブを買つて又走り出す。大變な坂だ。足が動かぬ位だ。それなのに下り坂になると、ひとりてに走れる。「あ、苦しい」と、僕は思はず知らず叫んだ。行逢ふ人は皆

僕二人を見て笑つてゐた。又力走する。一、二、三人と心地よく抜いて行く。空はよく晴れて、いかにもマラソン日和である。「もう彦根の町だ。頑張らうぜ。」お互に元氣付ける。又足を揃へて力走する。「それ田部が見えた。頑張れ。」と又もや元氣付ける二人は足並揃へて走り続ける。ゴールは近い。前に生の人が居る。僕は抜きたいが、足が思ふやうに運ばない。併し段々追ひつめて、決勝點で胸一つの差で二年生の人を抜いた一二番と書いた札。其には僕の長距離競争の實力が如實に示されてあるのである。苦しい思ひを我慢して、此の決勝點を踏んだのであつた。困難を突破した満足感が、心の奥底から湧き起つた。

## 夕 食 後

一年 澤田 久雄

夕食後、少年夜警團の太鼓の音が闇傳ひに微かに聞えて来た時、姉さんが、「今日は大分疲れました。腰が痛くてもう立てない位だよ。」と僕にいはれた。姉さんは今日一日中田の紫雲英刈りをされたのだから、疲れるのも無理はない。又お母さんも田を耕されたので、大分疲れて居られる。お父さんも、お母さんも、姉さんも、皆んな疲れて如何にも睡たさな顔をして居られるのが、氣の毒である。

思ふと、心に一層の緊張を覚える。

「位置に付いて……」

審判の聲。

胸の動悸は物凄く打ち出した。

「用意……」

一發の銃聲と共に僕等は一散に走り出した。

一秒！二秒！時間は刻々に過ぎて行く。僕は何も分らなかつた。死物狂の勢で走り続けた。

百米！百二十米！時間の経過するに連れて距離も亦少くなる。あと五十米！僕は十分疲労を覚えて来た。

「何くそ」

三十米！二十米！十米！五米！ゴールイン。

勝敗は定まつた。僕等は疲れを休めながらゆる／＼と歩み出した。

秋空高く運動場を横切る秋風も、僕等を慰めて呉れるやうに大變爽快である。僕等の努力を知らない鳥達が、輝く秋空にそれから紅葉した樹々の枝に、氣樂に啼いてゐた。やがて擴聲機が我等の二百米の結果を報導し始めた。

僕は耳を傾けた。それと同時に遠くで子供の鳴らす笛の音が聞えて来た僕等の努力を讃歎するやうに……

お母さんが、「お前が中學校へ通へるのもみんな此の様によく働いて居るお蔭だよ。一生懸命に勉強して人々に譽められる様な人となる様、心掛けねばなりません。もう直ぐ考査ださうですが、人の負けない様努めなさい。」と言つて下さつた。僕は此の言葉を非常に貴く感じた。

そして僕はお父さんや、お母さんや、姉さん達の僕に對する愛情の深大なことを悟つた。今迄僕は少しも感じて居らなかつたのだと思ふと、一層強く親の御恩の有難さを感じた。僕はお母さんの言葉をよく守り、父さんや、お母さんや、姉さんの御勞苦に對してよく感謝して、其の御厚恩に報いる様よく勉強を勤め励まなければならぬと思つた。遠くから聞える太鼓の調子も、時計の音も、僕によく勵み、よく報いと教へて呉れる様だ。

## 運 動 會

一年 寺田 慶 造

「頑張れよ！」「負けるな」  
聲援は場内を揺がす。

今第一學年二百米の眞最中である。僕等幾人かは出發點に並んだ。そろ／＼胸がさき／＼し始めた。二百米！三百米僕は此の二百米の事ばかり思つてゐた。大勢の強敵を相手にと

## 慰 問 文

一年 木下 長 治

懐しい故郷を離れられて、果もない滿洲の原野で、憎むべき匪賊・馬賊の討伐をしてゐる下さる皆様の御様子、目の前に映ります。御勞苦をお察し申上げます。滿洲の野で、我々の生命線守護の爲、東洋平和の爲に、此の暑い日中、寒い夜中、寢食を忘れてお働き下さる皆さんに對しまして、みなにお禮を言つてよいか分りません。僕等が何時も平和に暮して行きますのは、畏き極み乍ら 天皇陛下の御稜威の御蔭であります事は勿論ですが、貴方々の御勞苦の賜であります僕達も早く御國の爲に盡したいと考へて居ります。各國とも太平洋に目を付けてゐる様ですから、何時攻めて来るかも分りません若し露兵が攻めて来ましたら、内地に居られを兵隊さんも出掛けて行かれるでせうから、残るのは老人、青年、我等ばかりだと考へます。空襲でもして来ましたら、毎年行はれます防空演習や、教練の時に教はつた、防空の話を思い出しまして、立派に敵機を追ひ拂ふ覺悟であります。さうそ内地の事は心配しないで下さい。最後の御勝利をお祈りします。さようなら

## 運動會

一年中村博

「しつかり。」と、  
皆が應援する。空は日本晴で雲一つない。ラインへ並んだ時、体がぶる／＼震へてゐた。

「用意！」と  
その聲が消えない中に僕は飛出した。縄が足にひつか、つてうまく進行出来ない。急れば急る程氣がいら／＼して、さうする事も出来ない。行く時は前へ足を揃へて飛ぶやうになつてゐた。併し周章で、ゐた僕には、規則通り行く事が出来なかつた。歸りは自由飛びときまつてゐたので、僕は今までの引けを此處に取り戻さうとして、夢中に走つた。そのお蔭で、さうやらかうやら三等の榮位を得た。此の三等の榮位を勝ち得た事は、僕に取つては鬼の首を取つた事よりも、一層嬉しかつた。

## 小學校の恩師に近況を報ずる文

一年大西一男

安心下さい。

それでは餘り長くなりますから、此で擱筆致します。では御身体御大切に下さいませ。さようなら

九月二十八日

大西一男

## 慰問文

一年小南欣一

炎暑焼くが如き、滿洲の野に、日夜寢食も忘れられ、滿洲國の爲、我が同胞の爲、第一線に立つて活躍されつゝ、ある我が親愛なる皆様方に、僕は御見舞の手紙を差上げます。

僕は此の四月、滋賀縣の一中に入學した者です。新聞で觀、雜誌で讀み、先生より御聞きしますに、兵隊さん方の御勞苦は、並大抵ではないさうですね。滿洲國は今や世界の獨立國として認められて居ります。

其の蔭には、そんなに貴方々の貴い血が流れてゐるでせう。全く皆様方の血と汗の賜であると思ひます。

流汗淋漓たる炎天の下、焼けつくやうな砂塵を浴びつゝ、高粱畑の敵を追ひ散らし、又酷寒身を刺す冬の日に、轉びては飛び起き、飛び起きては轉ばれながら、匪賊と火花を散らしておいてになる有様が、目に見えるやうです。

嗚呼皆さんなれこそ、斯様に働いて下さるのです。

先生その後御無沙汰致して居まして實に濟みまん。先生は此の頃如何御暮しですかお伺ひ申上げます。

僕も第二學期のスタートを切つて、毎日元氣に通學致して居りますから御安心下さい。僕等の好きな運動會も、十一日に開催されます。僕は運動は不得手ですが、必ず一所懸命にやる心算で御座います。又十四、十五、十六の三日間は我が湖國の誇る豪華祭、長濱祭が盛大に行はれます。さうぞ一度是非とも御越し下さい。一同御待ち申して居ます。祭と申しますと、最早十月ですね。去年の十月頃は、もう一所懸命に入學試験の勉強を致して居ましたね。そして先生は一心になられて僕等を御指導下さいました。嗚呼思へば早いものです。雨の日も、風の日も、黒板の字が見えなくなる迄、僕等が此の彥中の關門を突破し得る様にと、真心の籠つた御聲で御指導下さつた先生の、あの當時の御風貌が、今尙眼前に髣髴として参ります。僕は先生のこの御鴻恩を終生忘却致しません。それなのに、僕の一學期の成績は僕の思ふ通りに行かなかつたのです。二學期こそは頑張つて御覽に入れます。

そして二學期の終りにこそは、先生の御宅へ御伺ひし、共に喜んで戴ける様にと、それを唯一の樂みに努力精進致して居ます。入學當時のあの意氣込みで、あの時先生に御出ししました手紙の様な決心で今學期こそ努力致します。

幸に長濱から通學してゐます者は、異狀有りませんから御

我々一中の生徒は、本校の校訓「本校生徒は、聖旨を奉體し、敬神崇祖、實實剛健、勤勉力行、和衷一心、以て至誠奉公の國士たるべし。」を何時も旨とし、至誠奉公の國士とならうと勉學に勵んでゐます。僕は必ず至誠奉公の國士となります。僕の中學入學の目的は、軍人志願です。

今や我が國は、世界各國を相手に、經濟方面、又軍事・貿易方面に於て、苦しんでゐます。

此を平和の治世と化するものは、僕等の務と思ひまして、一生懸命やる覺悟です。此の位の事は皆さんの勞苦に比ぶれば何んでもない事です。内地は今稲苗を植を終わりました。

暇が御座いましたならば、御文通を御願ひ申し上げます。最後に皆々様の御武運長久を御祈り申します。

## 夕食後

一年松田又次郎

「兄さん！御飯ですよ。」

と、呼ぶ妹の聲、

「兄ちゃん！御飯だよ。」と、呼ぶ無邪氣な弟。

「嗚呼！喧しい。」僕は未だ勉強が十分に出来てゐないのでその優しい聲もまるで僕に取つては悪魔の様である。五遍、六遍と其の聲が聞えて來るので、仕方なく食臺の前に坐つた